

Origami Tanteidan Newsletter 折紙探偵団新聞

49号

新連載開始

北條高史

折り紙という方法

「折り紙という方法」

第一回：「不切一枚折りにハマる」

＜これは魔法ではない＞

「不切正方形一枚折りでいくつでも、どんな長いカードでも出せます。用紙の内部など、カード以外の部分をうまく小さく畳み込んでしまえば、カードが相対的に長くなりますから」

私が折紙探偵団に入会したばかりの頃に聞いた、目黒俊幸氏の言葉である。当たり前のことをそのまま正直に、かつ分かり易く述べた表現だと思う。

五年前、おりがみはうすの存在を知り、前川淳氏や川畑文昭氏の複雑作品に圧倒されて全治二ヶ月(?)の大ダメージを受けたばかりの頃。当時の私は、「折紙設計」をまるで魔法にも似た、物理を超えてどんな形でもひねり出せる技術と思っていた。自分ではけっしてたどり着けない不可侵の聖域、ごく一部の特別な人たち(超折紙能力者?)にしか使いこなせないものだと思い込んでいた私は、この表現に大きな衝撃を受けた。「なんだ、そんな物理的に当たり前じゃないか。」…折紙設計に対して抱いていた淡い幻想が音をたてて崩れていった。…うらみませよ目黒さん。(うそうそ)

複雑な完成形状をもつ現代創作折紙作品に対する批評として、「魔法みたい」というのをよく見かける。以前の自分もそうしたことを言う中のひとりだった。しかし折り紙は非常に正直な造形方法である。魔法のように見える完成形も、人間の手で、紙の持つ物理的性質の範囲内で作り出されたものでしかない。そんな当たり前のことをこのときになってやっと自覚できるようになった。

そうして私は、怖々ながらも、折紙設計の世界をのぞいてみようと思いはじめた。折紙設計に関するいくつかの理論の中で、目黒氏の一値分子(折り畳むと、その周囲の線がすべて同一直線上に乗るような図形)による方法が最も学び易い(とっつき易い?)ものに思えたので、目黒氏の連載「実用折紙設計法」をくりかえし読み、理論はほとんどわからないながらもいろいろな一値分子を組み合わせて遊ぶようになった。そして、折紙設計という技術を、すこしずつ、自分なりに「体で覚えて」「結果的に」「使える」ようになっていった。前川氏や川畑氏の展開図を見て、だいたいの基本的な折り畳まれた形状がイメージできるようになったときは不思議な感動をおぼえた。これができるようになるには、ひたすら手間と時間をかけて紙と遊ぶことが一番重要である。

より多くの創作を楽しんでおられる方々に、目黒氏の理論を学んでいただきたいと思う。より多くの方々に、この感動を味わってほしいと思う。カードをある程度自由に折り出せるようになると、折り紙ってこんなにもさまざまな可能性をもったものだったのか、と思えてくるはずだ。そして、各人の得意分野(美術や数学のセンスとか、デザイン処理など)を生かした方向へと設計法が修飾されてゆく。特に、美術に本格的にとりくんできた人たちがこれを学んだら、不思議な世界を内包する作品が次々に出てくることだろう。それがとても楽しみである。使いこなせるようになった上で、使うか使わない

かはその人の自由であるが、しかしこれを学ぶことで、確実に、文字どおり「世界が広がる」であろう。

＜やっと本題です＞

現在、自分の創作作品などと称する恥ずかしいものを、個展というかたちで多くの人の目にとまるところに置かせていただいている。探偵団の多くの先輩方・友人たちの作品から学び、自作品も増え、折紙設計もなんとか自分なりに使いこなせるようになってきたここ最近、これまで自分のやってきたことについていろいろと考えるようになった。いいタイミングで幸運にもこのたび巻頭論文を担当させていただけることになったので、この機会を利用して、「折紙設計法が出現・発展して自由自在な外形(シルエット)をつくれるようになった今、折り紙という方法によってさらに造形のどのような方向性を探求するか」という、多くの作家たちが現在取り組んでいるであろうテーマについて、筆者が自己内基準として考えていること、挑戦していることを述べてみたいと思う。今回は導入として、この前段階の「不切正方形一枚折りにハマりこむまで」のことを書いてみた。次回からは、最近開発した新技法についてもいくつか触れる予定である。

折り紙 という 方法

北條高史



とこが **折紙時評** やねん

前川 淳

まえかわ じゅん Jun Maekawa

第9回 折紙音楽全曲集

■この原稿を出稿したあとの3月28日、皆でカラオケに行きました。川上さんと笹出さん、小笹さんのノリには脱帽です。

探偵団の例会(毎月東京で開催)の後、一度だけ皆でカラオケに行ったことがある。例会後居酒屋に行くのは通例になっているが、カラオケに行ったのはこの時だけだ。折り紙の話だけで盛り上がり、カラオケなど必要ないからだ、この時はどういう経過か忘れたが、若いひと(と言っても二十歳過ぎ)からそうでないひと(と言っても、あれ、いくつだっけ)まで、15人ぐらいでカラオケに繰り出した。

そこでわたしが歌った歌……それは、「折鶴」(千葉紘子)だ。「折って畳んで裏返し」という歌詞が、折り紙愛好家の琴線に触れずにはおかない(?)一昔前の歌謡曲である。少なくとも曲名だけでもウケがとれる。

探偵団の集まりとしても珍しかったが、わたし自身もカラオケで歌うことはめったにない。折鶴コレクターとしてチェックしてあっただけで、「一昔前の歌謡曲」が特に好きというわけでもない。高校時代に、放送研究会というサークルでマニアックなDJ番組を作成していたので、音楽の趣味は偏っている。わたし自身は音楽系というより技術系で、アンプの製作やミキシングなどをしていたのだが、かたわらには、ジェフ・ベックとエリック・クラプトンのギターテクニクについて議論をしているひとたちがいるという「濃い」環境だった。その後30近くになってクラシックにはまり……おっと、話が折り紙にまったく関係がない。前号の丹呉岳春君の「おりすじ」ではないが、どうにも音楽の話は長くなってしまう。話を戻そう。

折り紙と音楽の話である。以前「探偵団新聞」に、音楽と折り紙の関係ということで、宮島登君がAZTEC CAMERAのKnifeというアルバムのジャケットに折り紙の船が使われていることを書いていた。そして、文の最後は「これだけである…。」

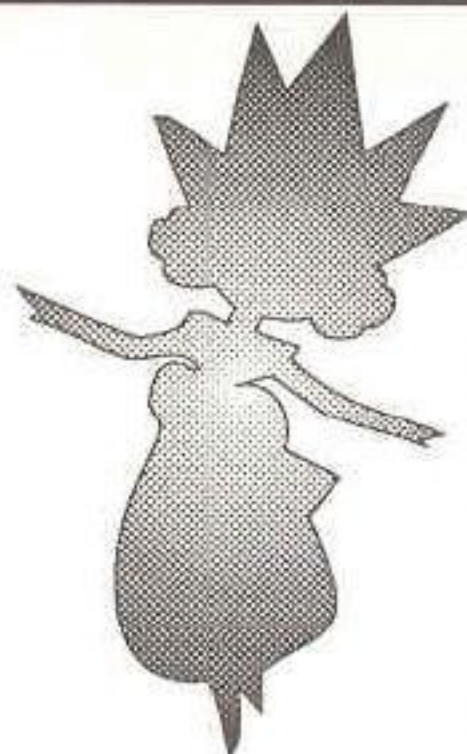
と結ばれていた。で、実際「それだけ」のような気がする。和モノでも、折り紙が登場する歌はそう多くないのである。以前、高井弘明さんがパソコン通信を使って、題名に折り鶴・折り紙を含む歌を検索してくれたことがある。その結果と、その後分かった曲を、以下に示そう。

千葉紘子	「折鶴」
高田幸吉	「折鶴さんど笠」
石川さゆり	「折鶴情話」
村下孝蔵	「折り紙」
高田亜樹	「折鶴海峡」
吾妻栄二郎	「折鶴の舞」
梅原司平	「ORIZURU」
ドリーミング	「おりがみの歌」

歌詞の中に「折り紙」が出てくる曲は他にもある。(例えば、童謡の「雨が降る」にも「千代紙折りましょ」の歌詞がある) また、ジャケットに折鶴が登場するアルバムもあるらしいが、そこまでは調べ切れていない。

さて、今回これらの曲を探し出して聞いてみることにしたのだが、結論から言うと、「折鶴」の他には、「ORIZURU」と「おりがみの歌」しか手に入らなかった。絶版のものもあり、中古CDレコード店などをあたなければ見つからないだろう。わたしもそこまでヒマではない。(そこまでって、それなりにはヒマなのか?)

「ORIZURU」は、広島をモチーフにした歌で、「子供と教育を考える集会」で歌われていたのを妻が聞いてきたことで判明した曲である。一方、「おりがみの歌」は、92年の映画「それゆけ!アンパンマン つみき城のひみつ」の挿入歌である。この映画には、その名も「オリガ姫」というヒロインも出てくる。美人で性格もよさそうで、まるで○○さん(女性は自分の名前を入れてください)のようである。それぞれ、実に「それらしい」曲である。



オリガ姫のシルエット

「折鶴さんど笠」は、同名の映画(監督・福田晴一、出演・高田浩吉/瑛峨三智子/三橋美智也 1957年)の主題歌で、ビデオも出ているらしい。「折鶴の秋太郎が、あやめ祭の潮来の土地へ5年

振りに帰って来た。不遇な姉妹を救う為に大立回り」という内容の映画で、「潮来の伊太郎」と区別がつかないが、折鶴のみならず「あやめ」もでてくるところに注目したい。えっ、あやめは折り紙のあやめじゃないって。そりゃそうだ。

石川さゆりさんと村下孝蔵さんは、これはなんとかなりそうだったのだけど、結局見つからなかった。「折鶴情話」は、上野発の夜行列車を降りると、折紙山(青森県に実在する山、探偵団新聞第3号参照)が雪景色だったりするかもしれない。一方、「折り紙」は、初恋の娘がかざぐるまをくれたりしそうだ。そして、「折鶴海峡」は、たぶん、願いを込めた折り鶴が波のかなたに消えるのである。

「折鶴の舞」は、歌というより、日本舞踊(?)のようで、振り付けも付いているらしい。「折って畳んで裏返し」する踊りかも知れない。

以上、手に入らないということ、はカラオケもないということである。折り紙愛好家のあなたが、カラオケで自らのアイデンティティを主張しようとするならば、やはり「折鶴」しかないのである! …いや、この歌、まじめな話、いい歌である。音楽著作権の問題で歌詞を長く引用できないのが惜しいぐらいである。本当だってば。

岡村昌夫

第33回

おかむら まさお Masao Okamura

■ダイエットしたので右の似顔絵と差がつかしました。

おりがみ庵

ひとりごと



「糸入れ」と「石畳み」

前回触れた伝承の「糸入れ(糸屑入れ)」は、現代では「めんこ」とも呼ばれている。昔の人は物を大切にしたので、着物をほどいたりしたときに出る糸屑も捨てないで保存したそうである。「糸入れ」は糸屑を包んでおくための実用品であった。「めんこ」も遊びの実用に耐えるものではあろうが、実際のめんこは長方形か円形であって正方形のものは無いし、むしろ正方形の紙で正方形の板状の物を作るところにこの折り紙の面白さがあるのだと思う。「めんこ」は使用するにしても折ったままであるが、「糸入れ」は後で拡げるために「畳んで」おくものである。「畳む」という言葉には、「後で拡げる」という行為を前提にした意味が含まれていると言えよう。従って、「糸入れ」が「めんこ」に見立て替えられたときに、もとの「用」の側面が捨棄されて「絶対折り紙」としての過程を経たのかも知れない。前回で述べた「玉手箱」が、物を容れることを前提としない立体

に変わってきた過程にも、その「絶対化」が見て取れるだろう。

ところで、この「糸入れ」が、明治27年発行の雑誌『小国民』には「石畳み」という名で紹介されているのだが、この「石畳み」とは何だろうか。同誌掲載の折り図は、折り図発達史の中でも特筆されるべきものと思うので、ここで見て頂きたい。

「石畳み」という見立て

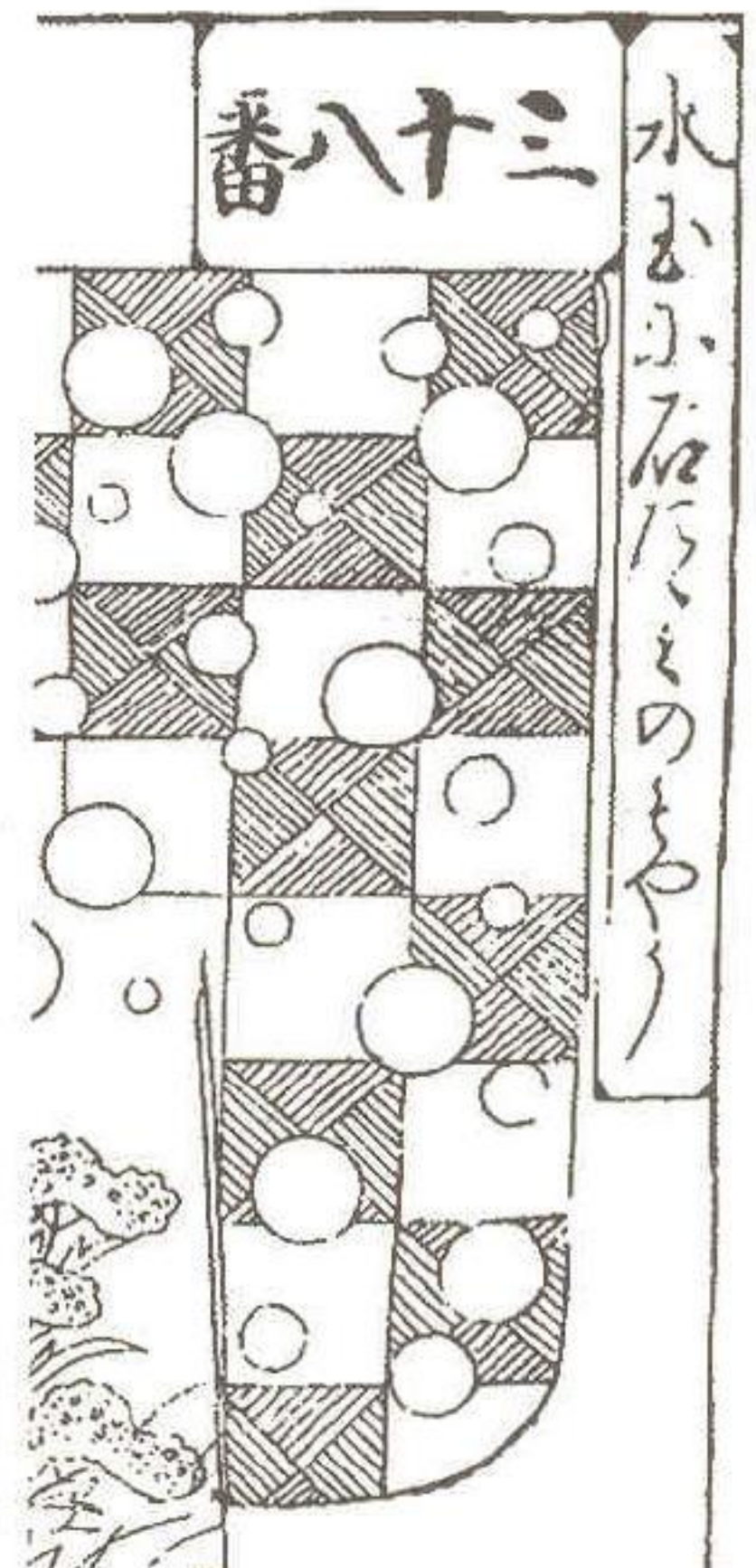
この「畳み」は、敷物としての畳みから出た意味であろう。板状の石を幾つも水平な平面上に敷きつめたものを「石畳み(整)」という。そしてまた、それに見立てて、いわゆる「市松模様」の類をも「いしだたみ」と呼んでいることが想起される。紋様の場合は必ず正方形だから、折り紙の「石畳み」は同名の紋様の見立てと考えてよいだろう。

そして、その見立てが成立した時期は意外に古く、この明治の少年雑誌より200年も遡る時代にすでに存在していたらしいのである。右に示した図版を見て頂きたい。宝永元年

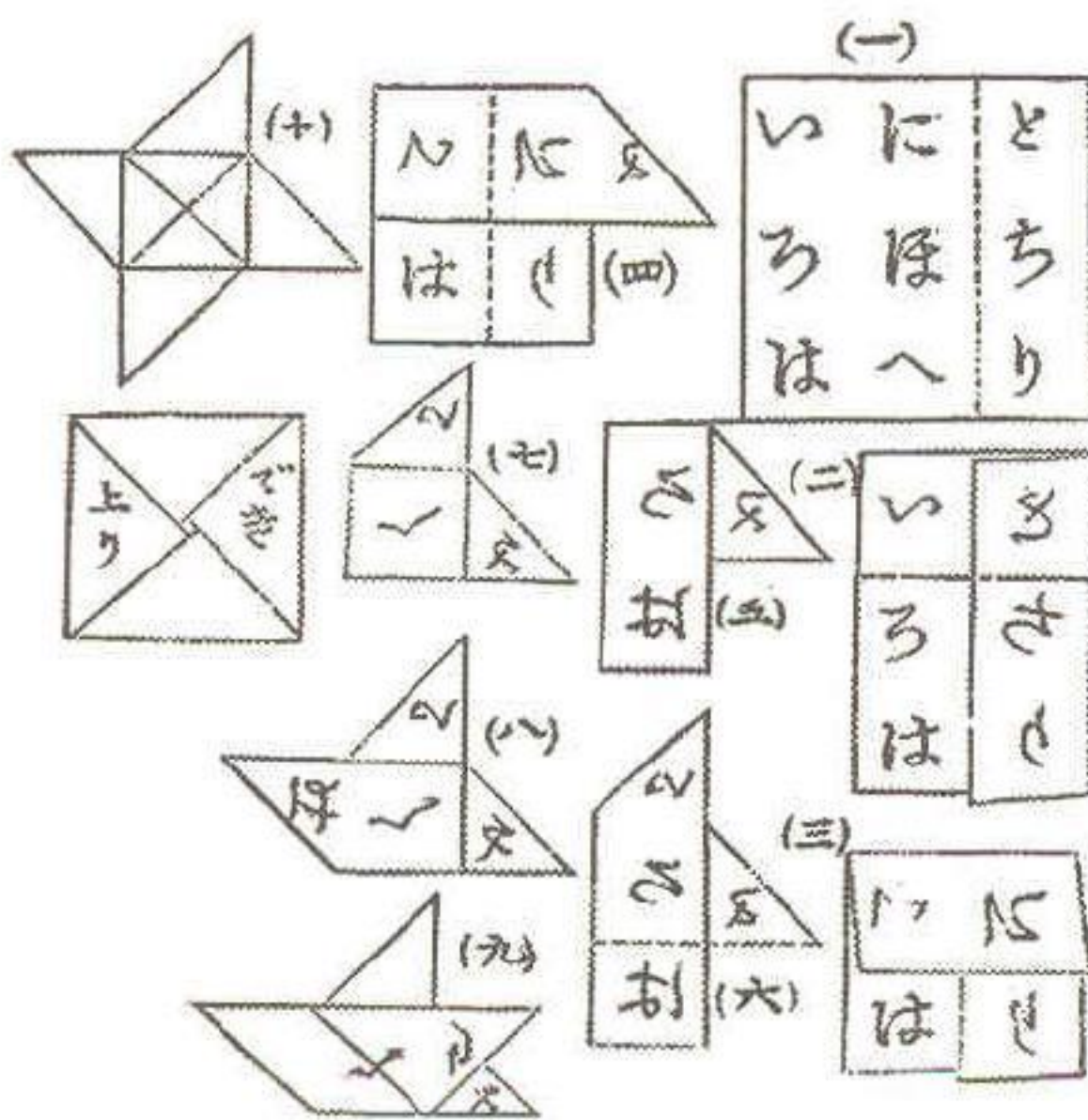
(1704)刊『丹前ひいながた』に「水玉に石たたみのもやう」とある小袖模様の市松の部分、どう見ても折り紙を並べているようだ。この書には、他に折り紙の鶴や宝船の模様も載せられており、この正方形を折り紙と考えても不自然はない。明治27年になって突然現われたものとする方がはるかに不自然であろう。

本紙27号の本欄に図版と解説を載せた宝暦7年(1757)刊

『絵本神名帳』の「行成紙」の項によれば銭を包むものとされているし、幕末の『かやら草』の、周知のものとして省略された中にある「いと入」がこれだとすれば、「包み」として使用された歴史も長い。しかし、古く「石畳みの模様」に見立てられたとすれば、「板状の正方形」としての形が利用されたわけで、このような現代的な感じの幾何的な見立てがこのよう



な古い時代からあったことに驚くのである。そして、前回に触れたように、これをユニットとして立体を組み立てることが『欄間図式』(1734年)の時代にすでに存在していたことも驚異的な事実である。さらに、ねじり折りとしても注目すべきものだ。



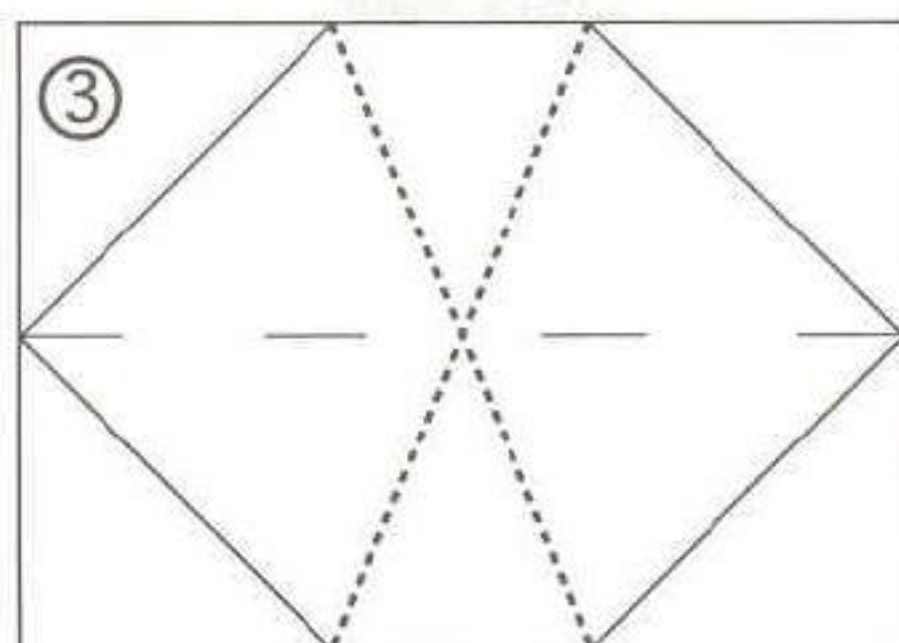
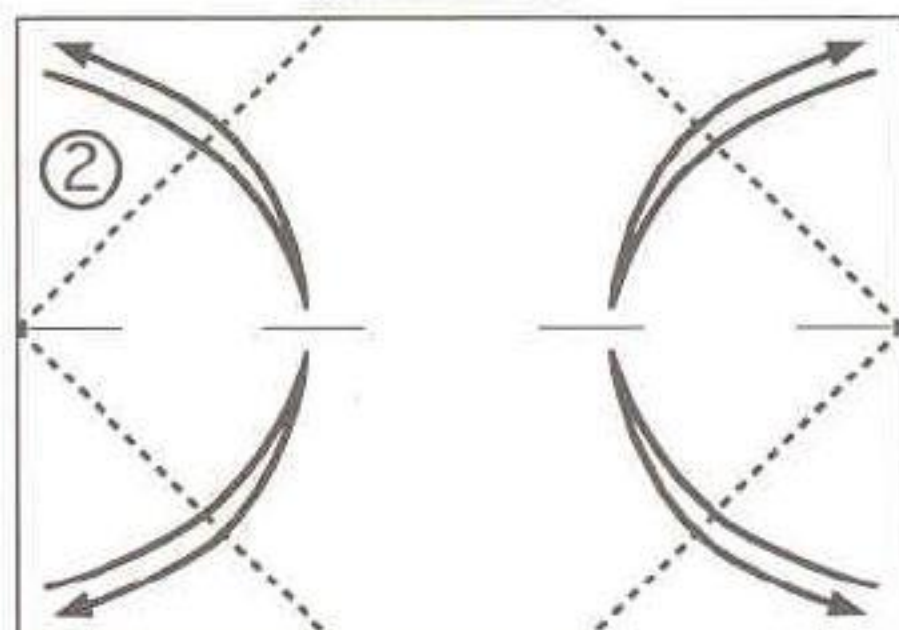
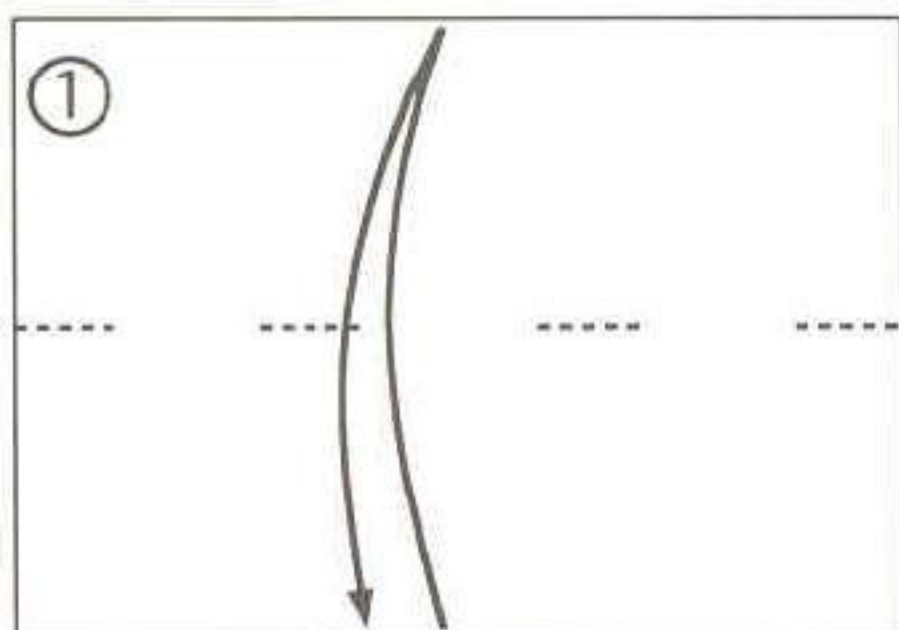
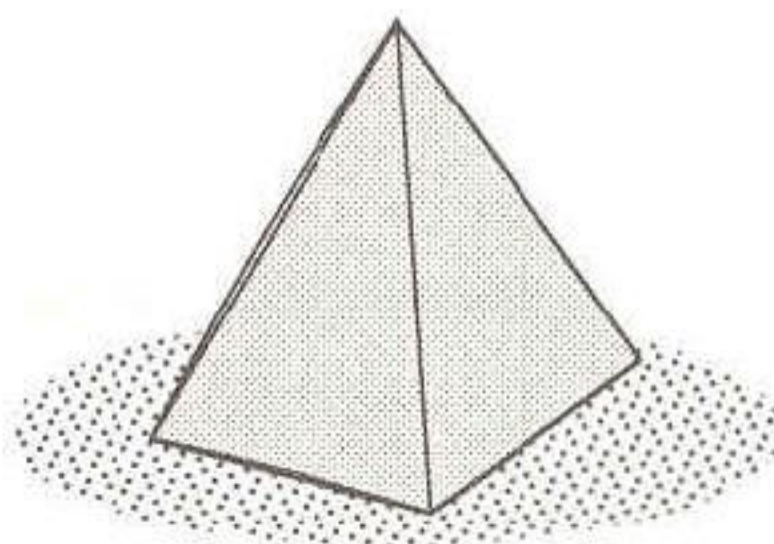
ピラミッド形ケース

創作：1997, 作図：1997.Sep.16 川崎敏和

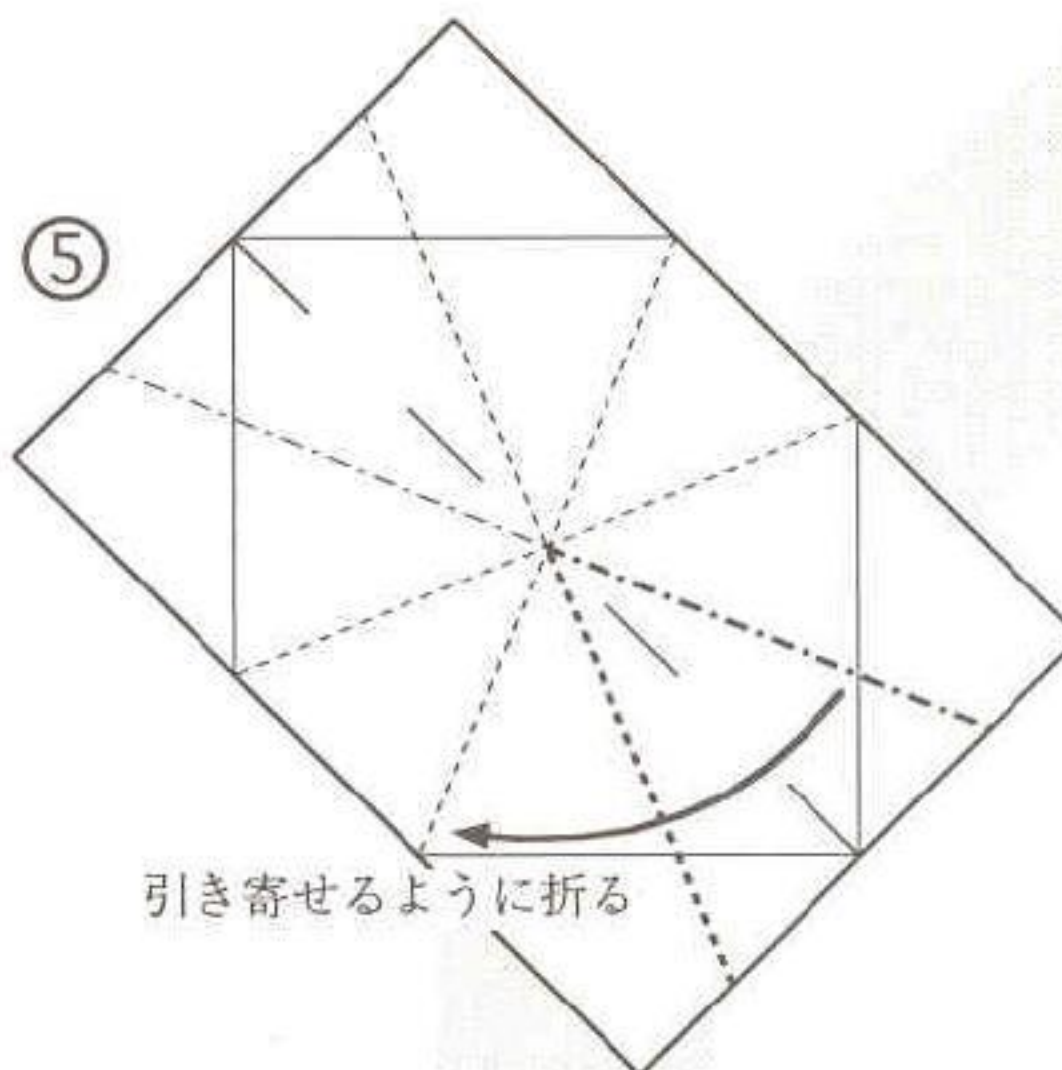
(1:√2の長方形)

ノートなど普通の長方形用紙で折ります。透明なアセテートフィルム(0.08mm厚)で折るとケースとして使えます。OHPシートでも折れますが厚いので苦労します。

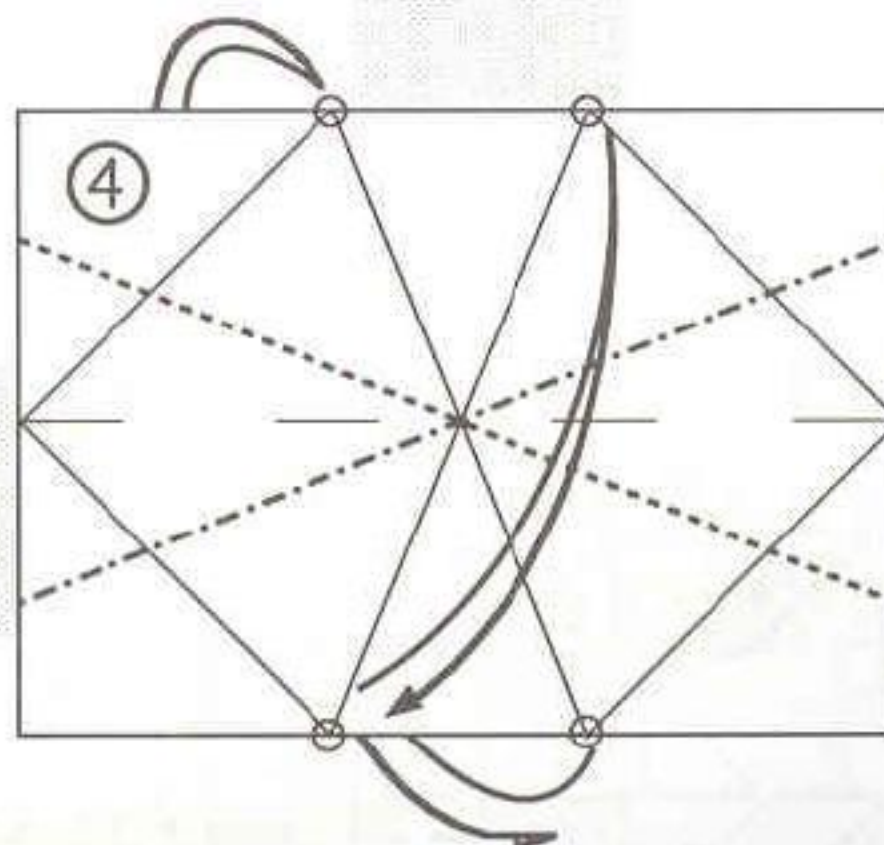
この折り図は折紙探偵団コンベンション折り図集3のピラミッドから不要な折り目がつかないように折り方を工夫したものです。折り紙には折り工程を工夫する楽しみもあります。早く折れる、簡単に折れる、無駄な折り目を少なくする、折り紙らしい、正確に折れる、といった事柄のどれを優先させるかで、折る工程は違ったものになります。既存の作品の折り方を自分流に变えることは結構面白くてやり甲斐のあることだと思います。

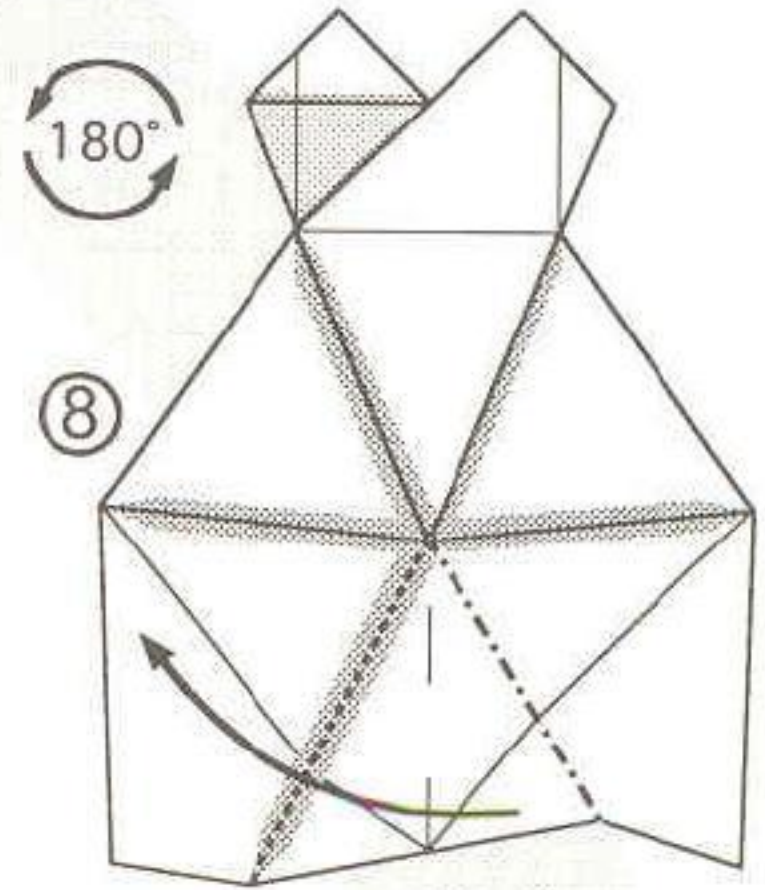
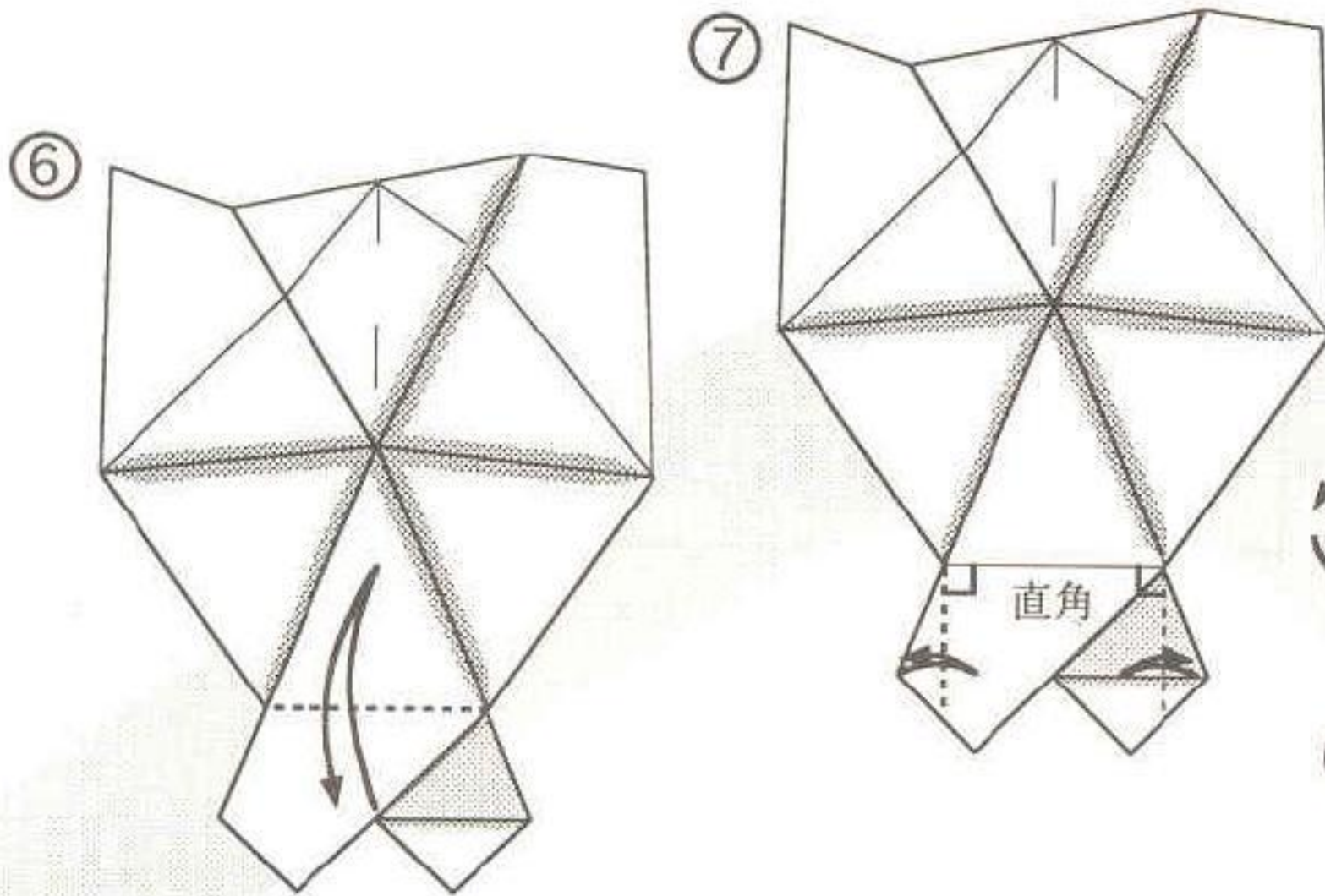


細い谷折り，山折り線は少し凹凸がつくだけ

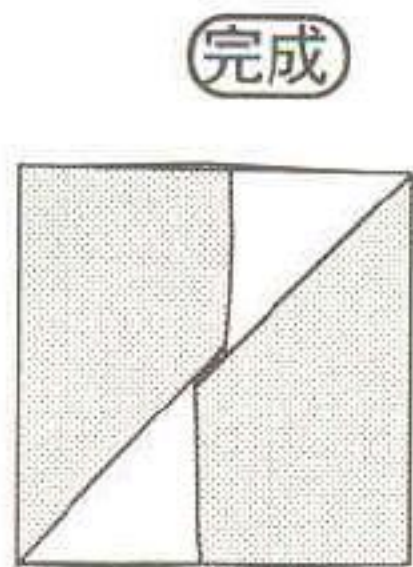


引き寄せるように折る

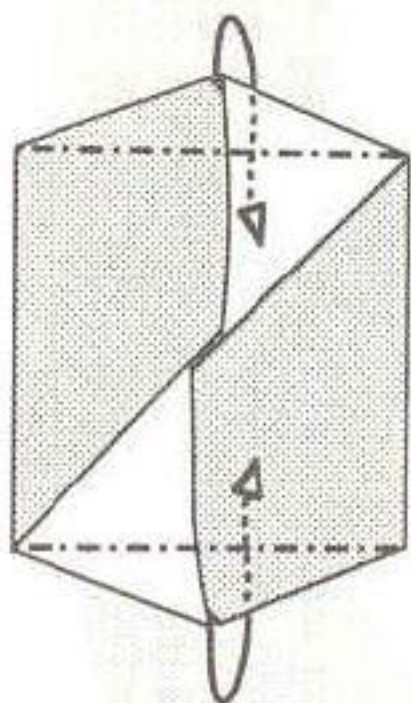




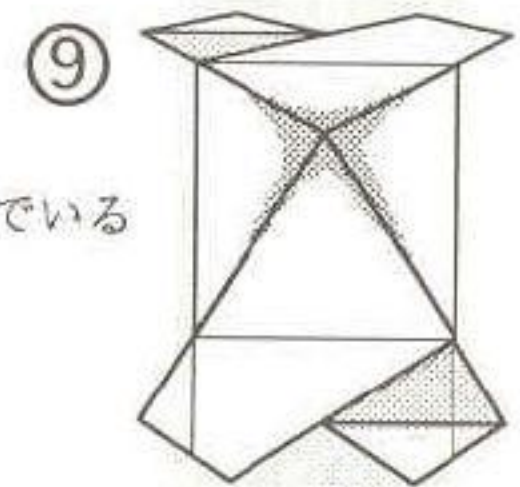
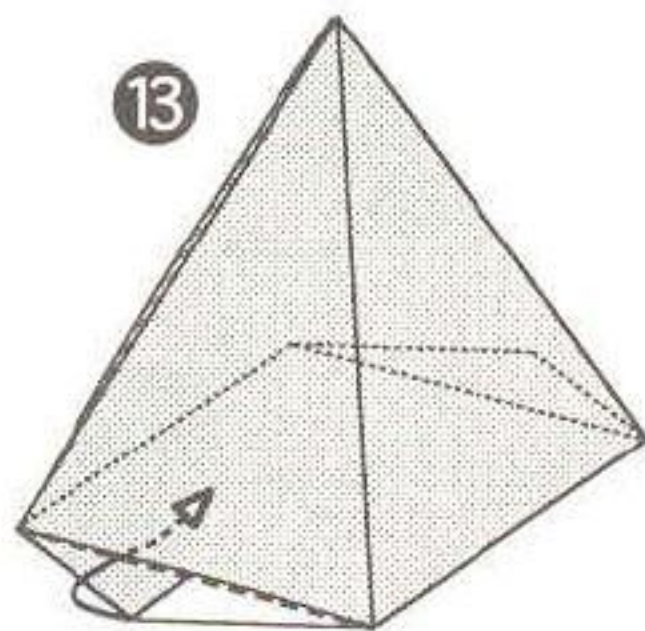
⑤同様に引き寄せるように折る
続けて⑥, ⑦も行う



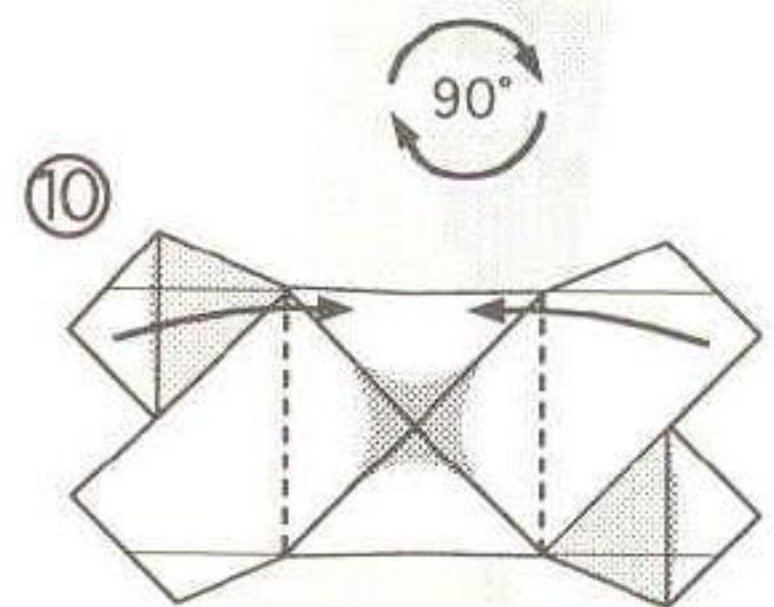
ピラミッド形ケース



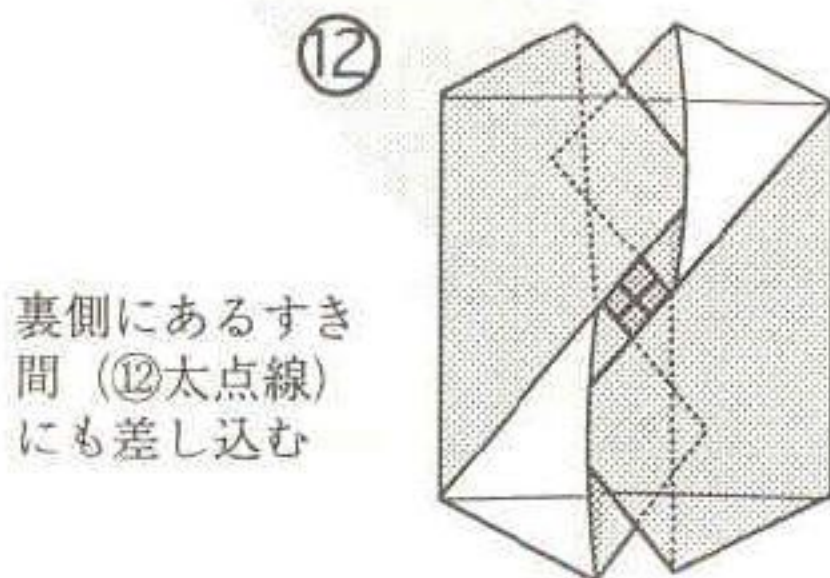
側面と底のすき間に差し込む



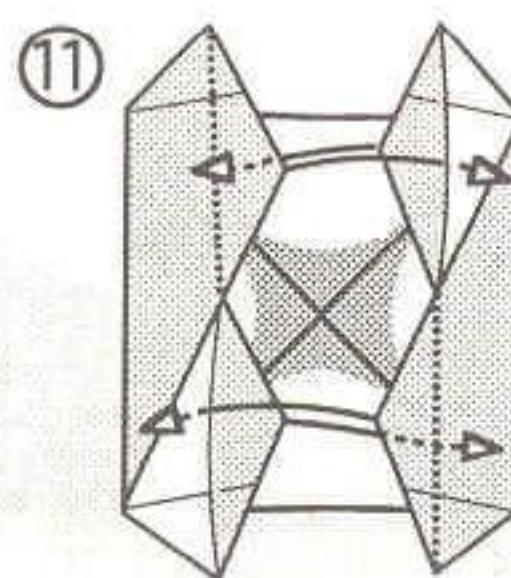
中央が凹んでいる



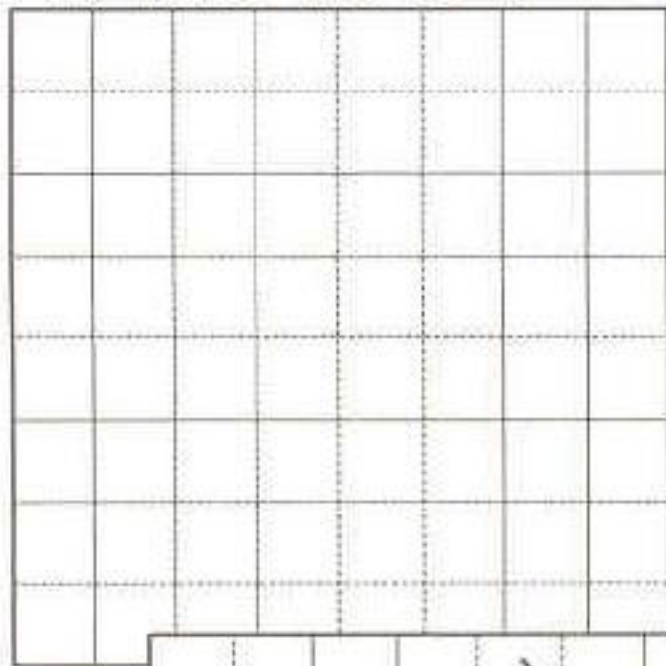
1.5倍拡大



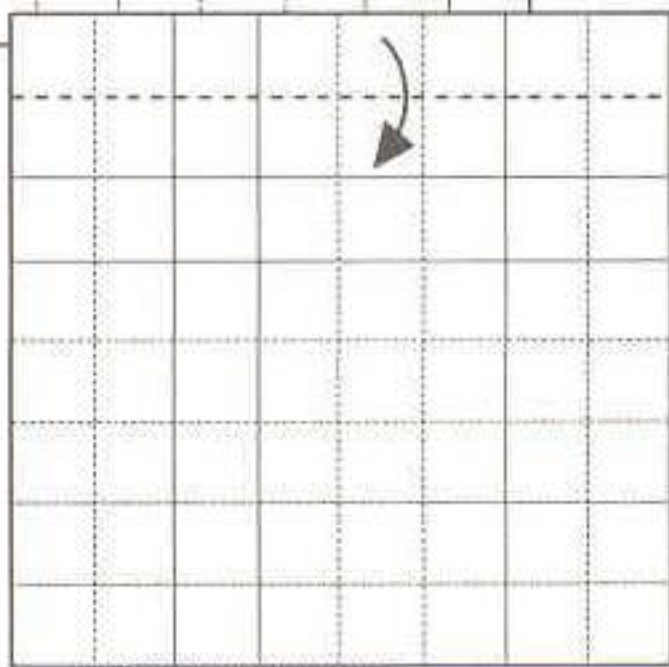
裏側にあるすき間 (⑫太点線)
にも差し込む



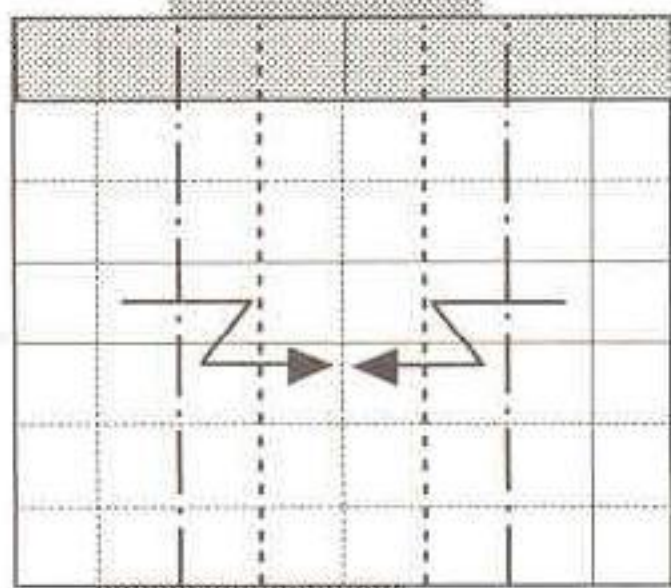
(1) 縦横8等分します



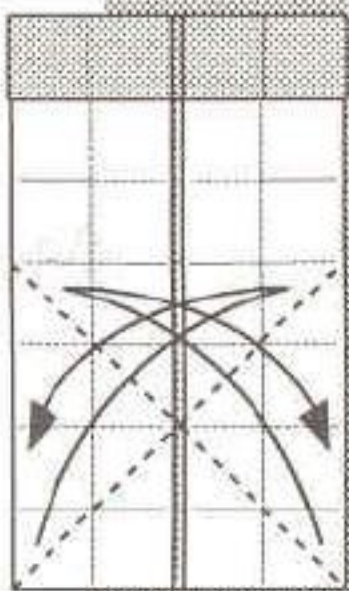
(2)



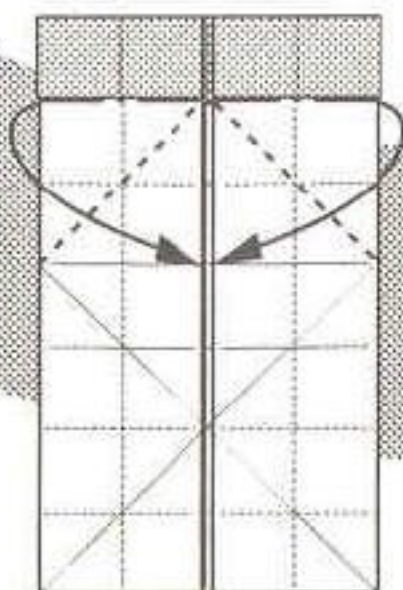
(3)



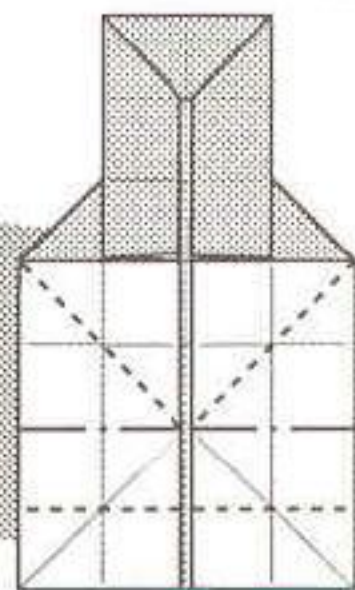
(4) 折りすじを
つけます



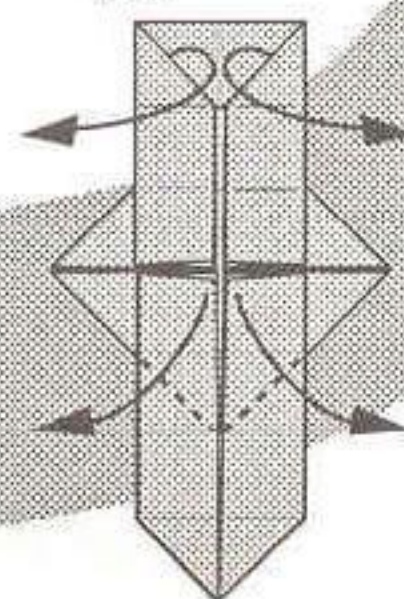
(5)



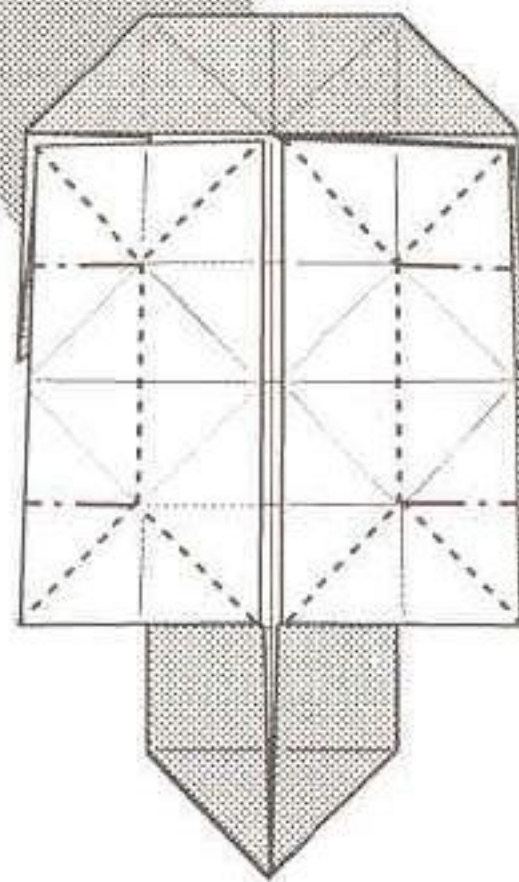
(6) 折り線に
従って畳む



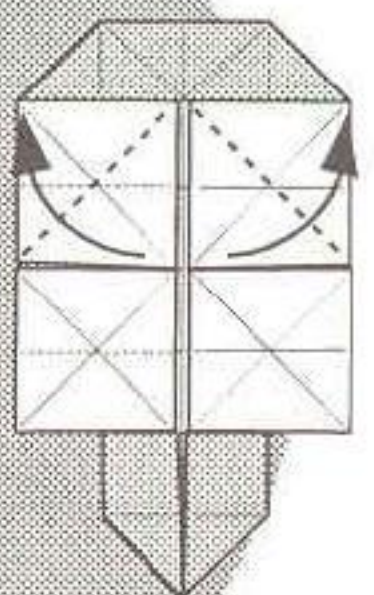
(7)



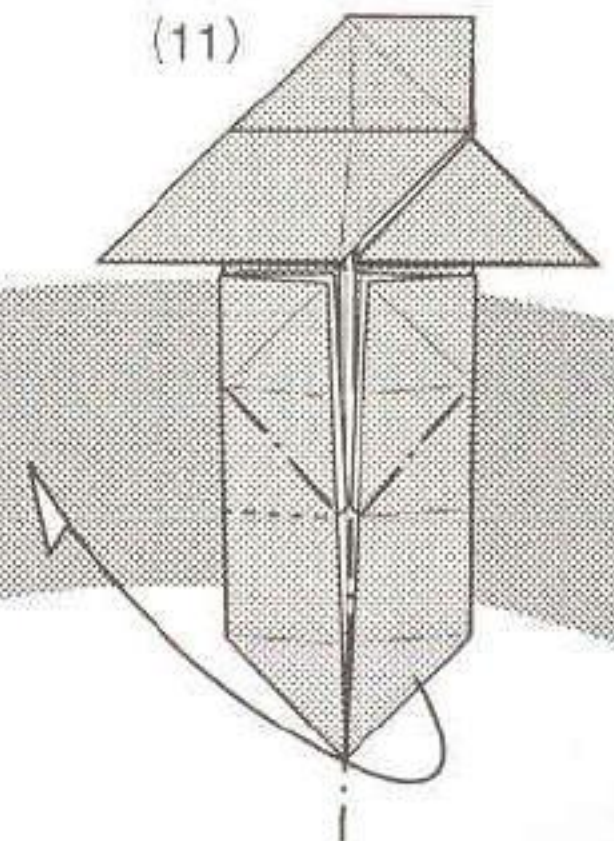
(9) 折り線に
従って畳む



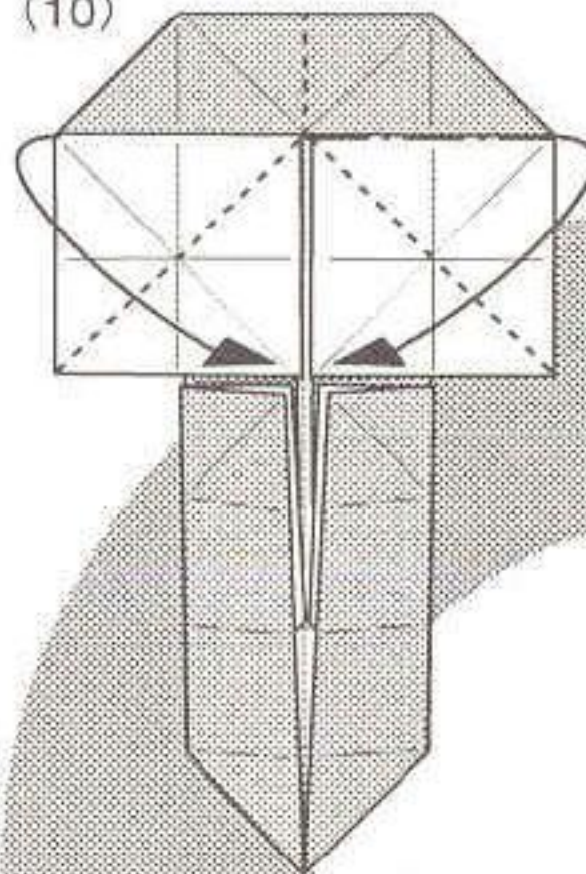
(8)



(11)

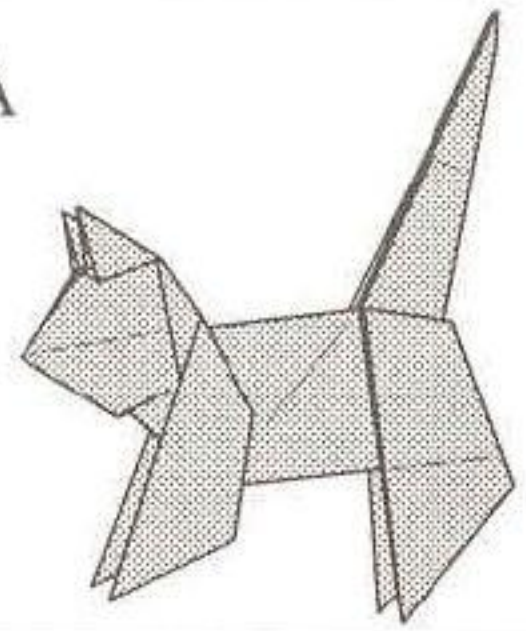


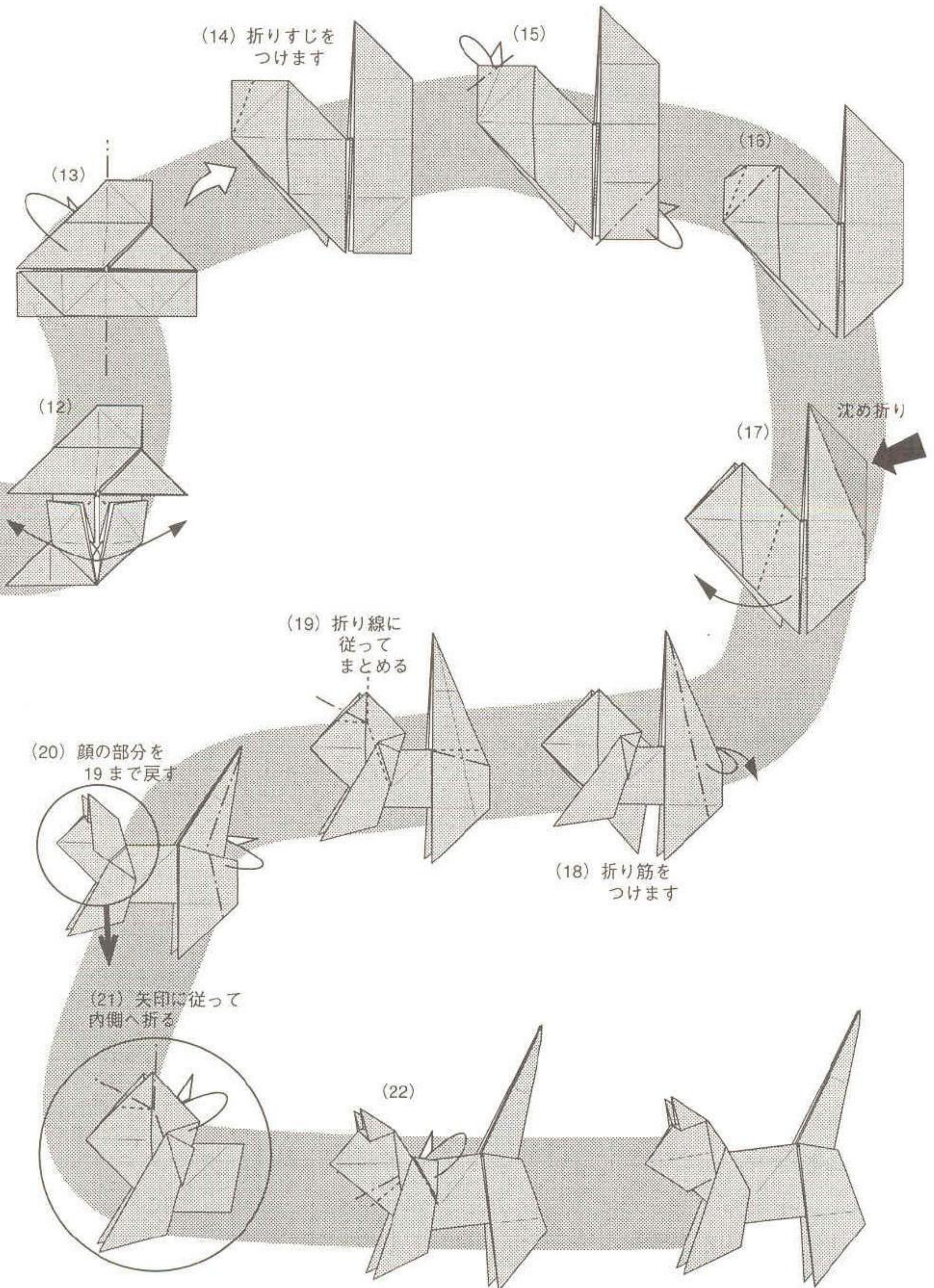
(10)



ネコ SEIJI NISHIKAWA
作) 1998年1月

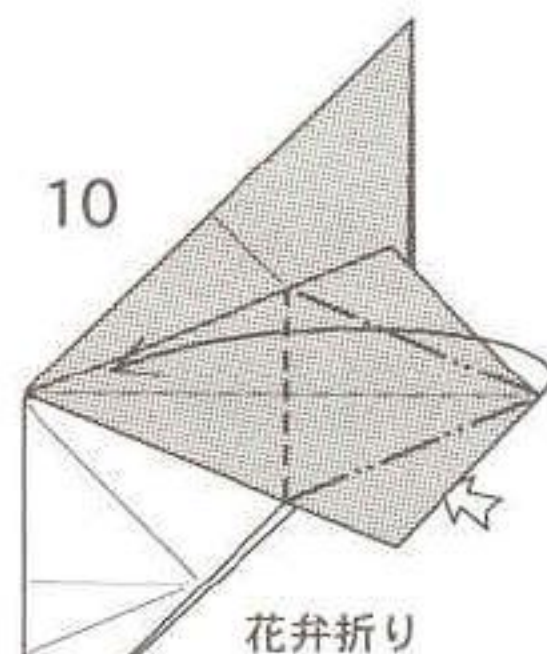
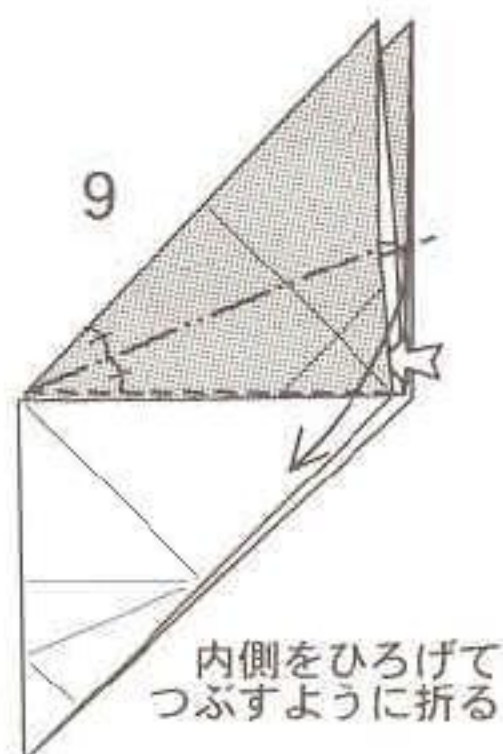
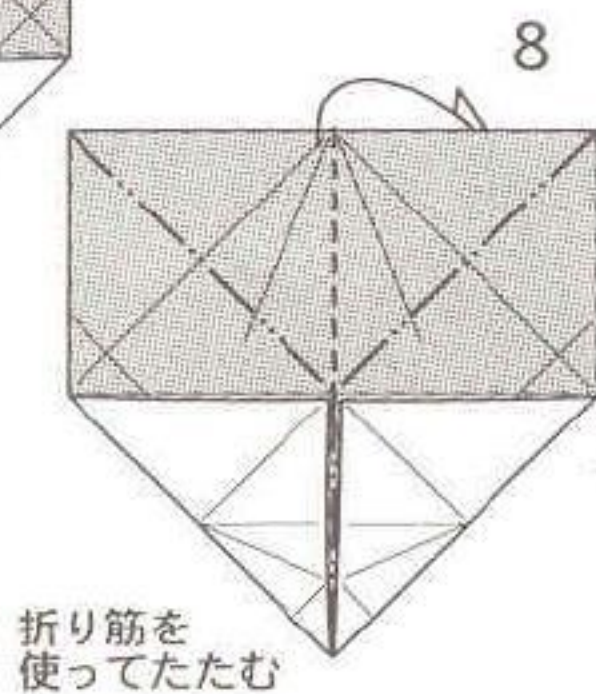
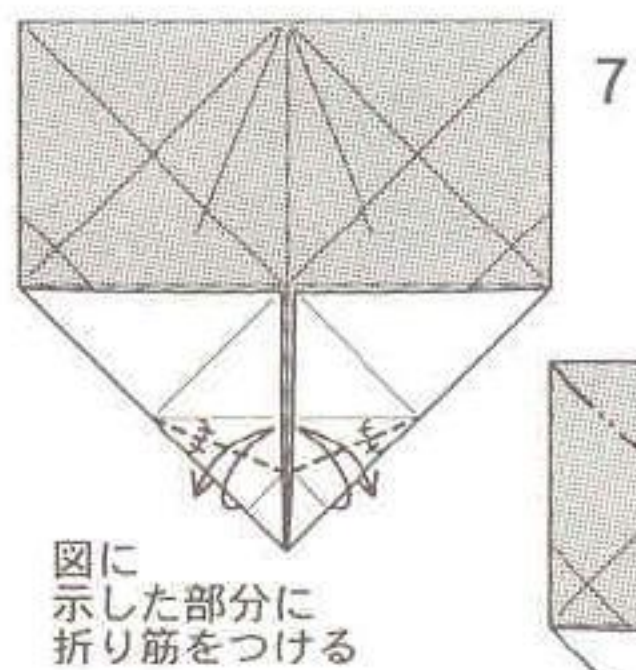
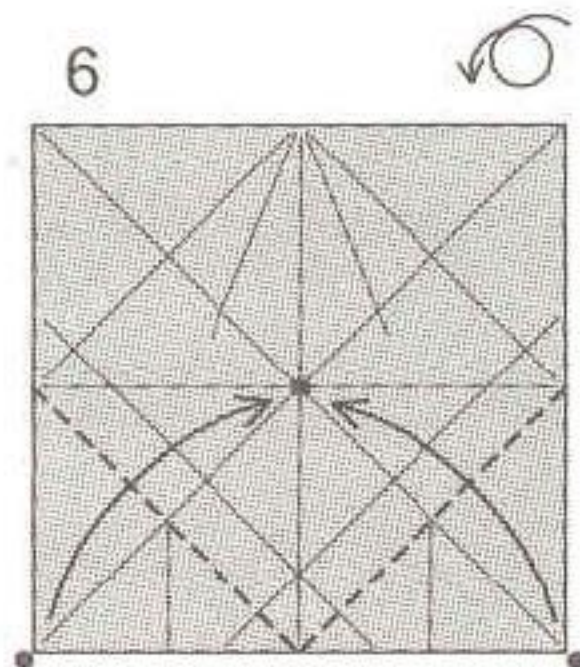
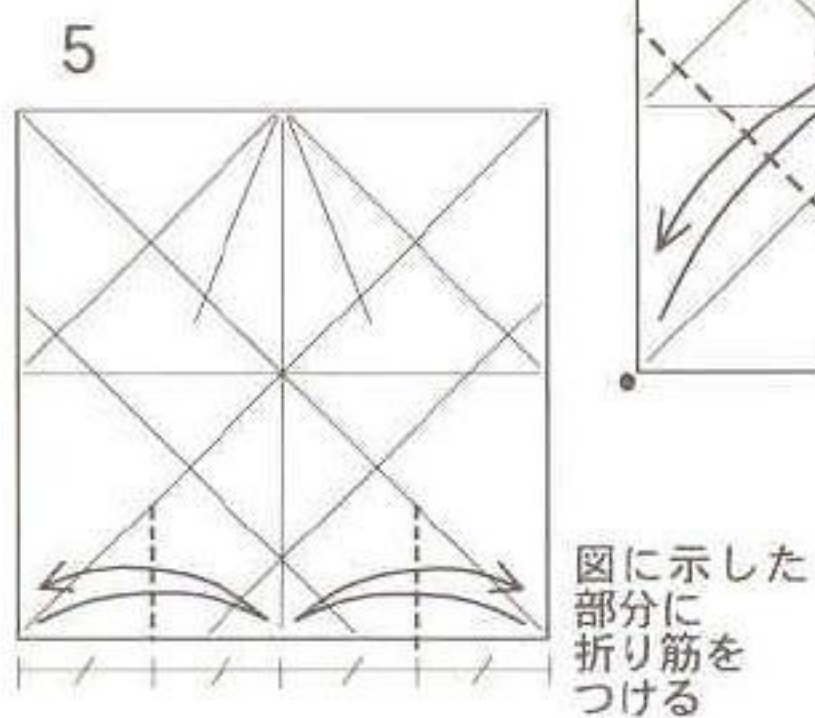
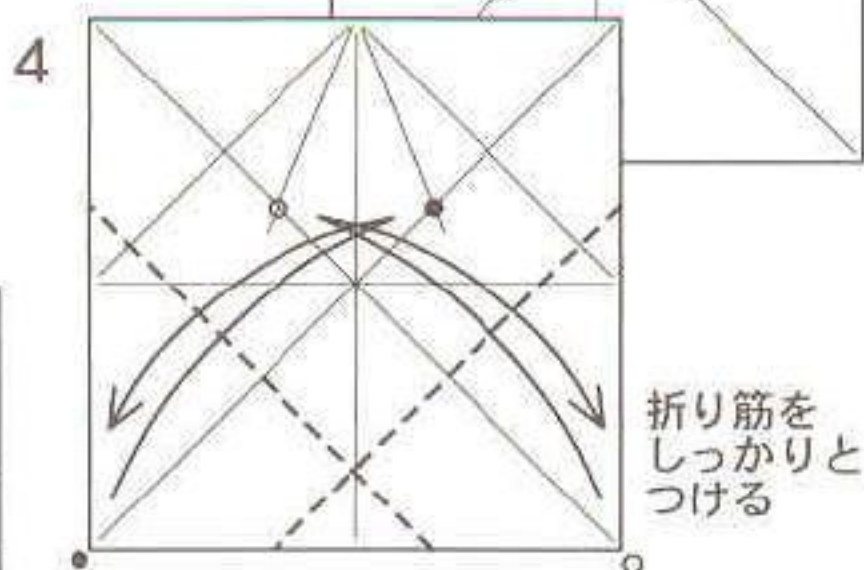
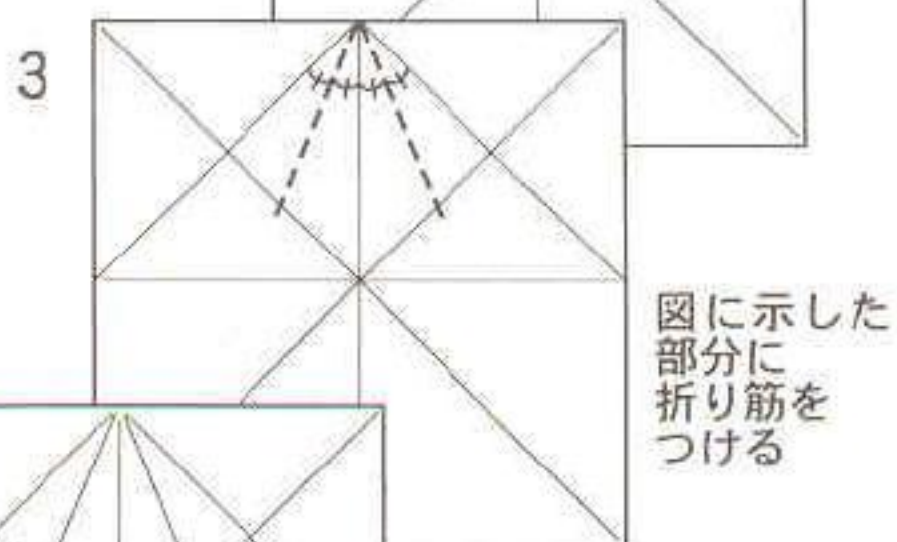
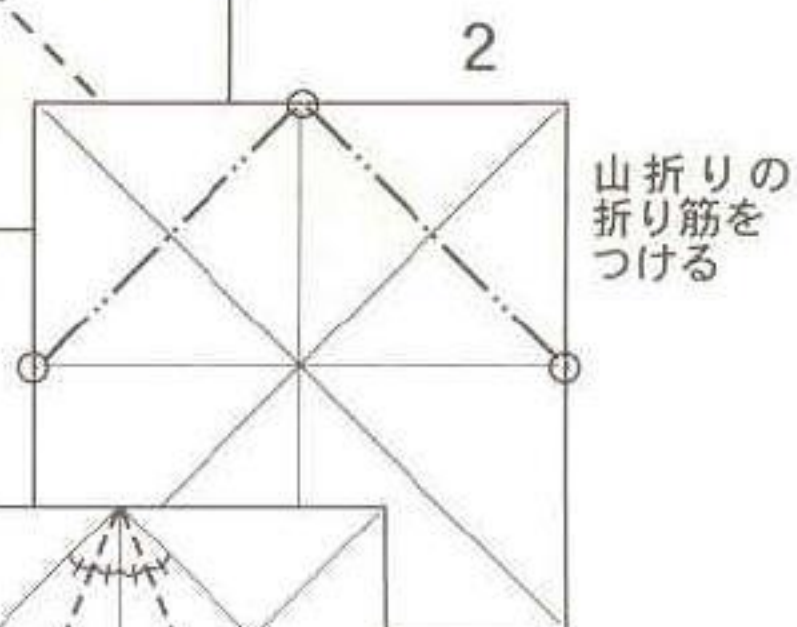
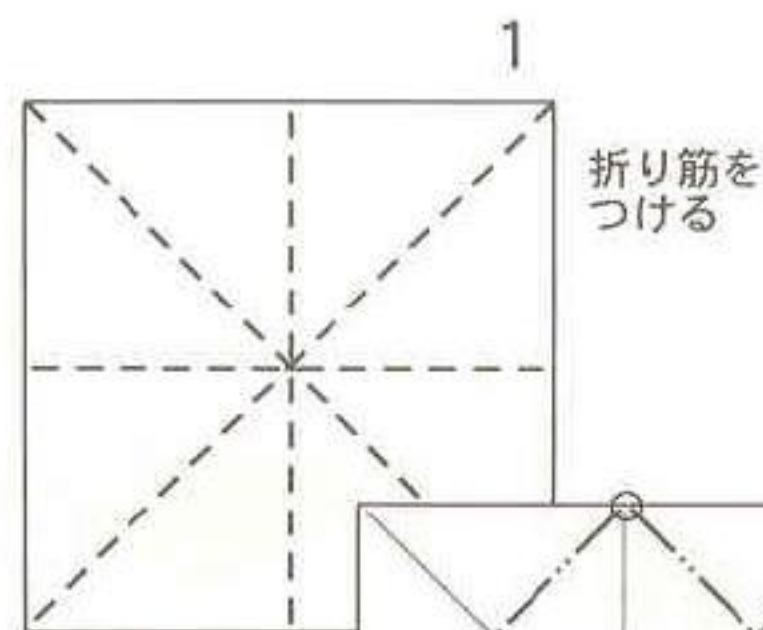
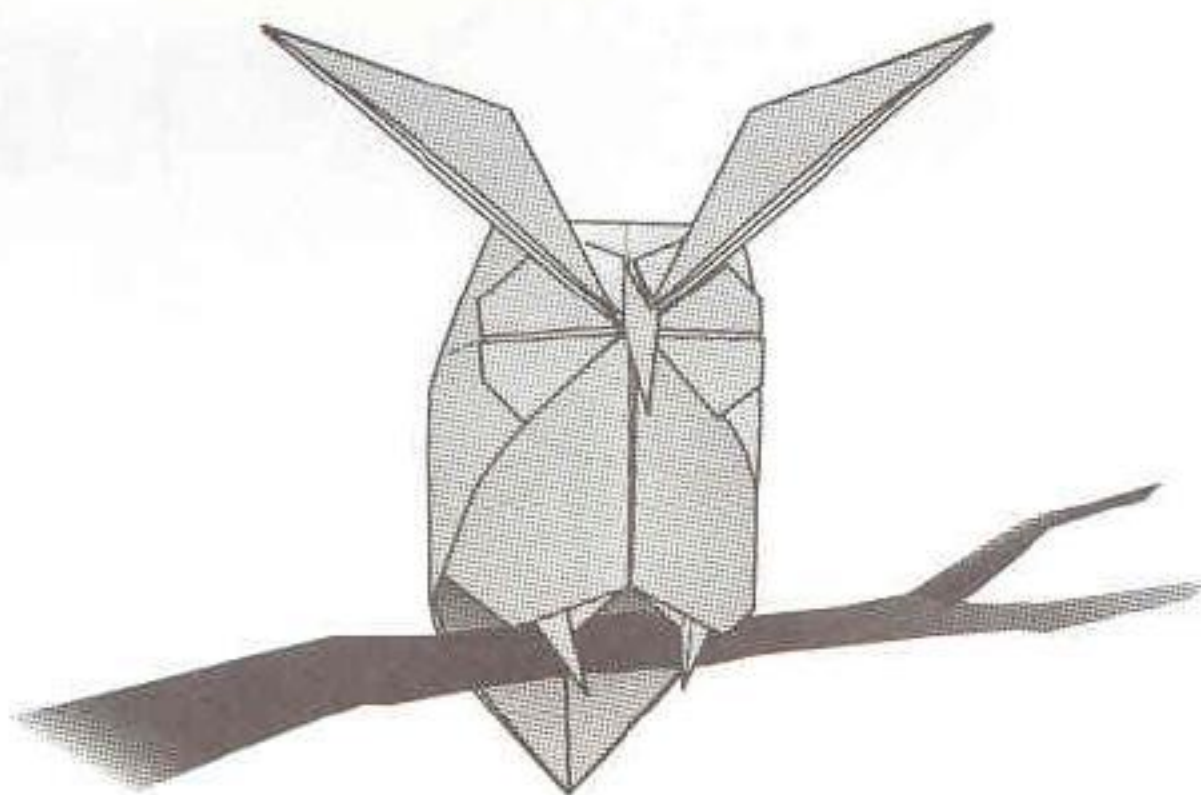
1998年3月例会講習作品

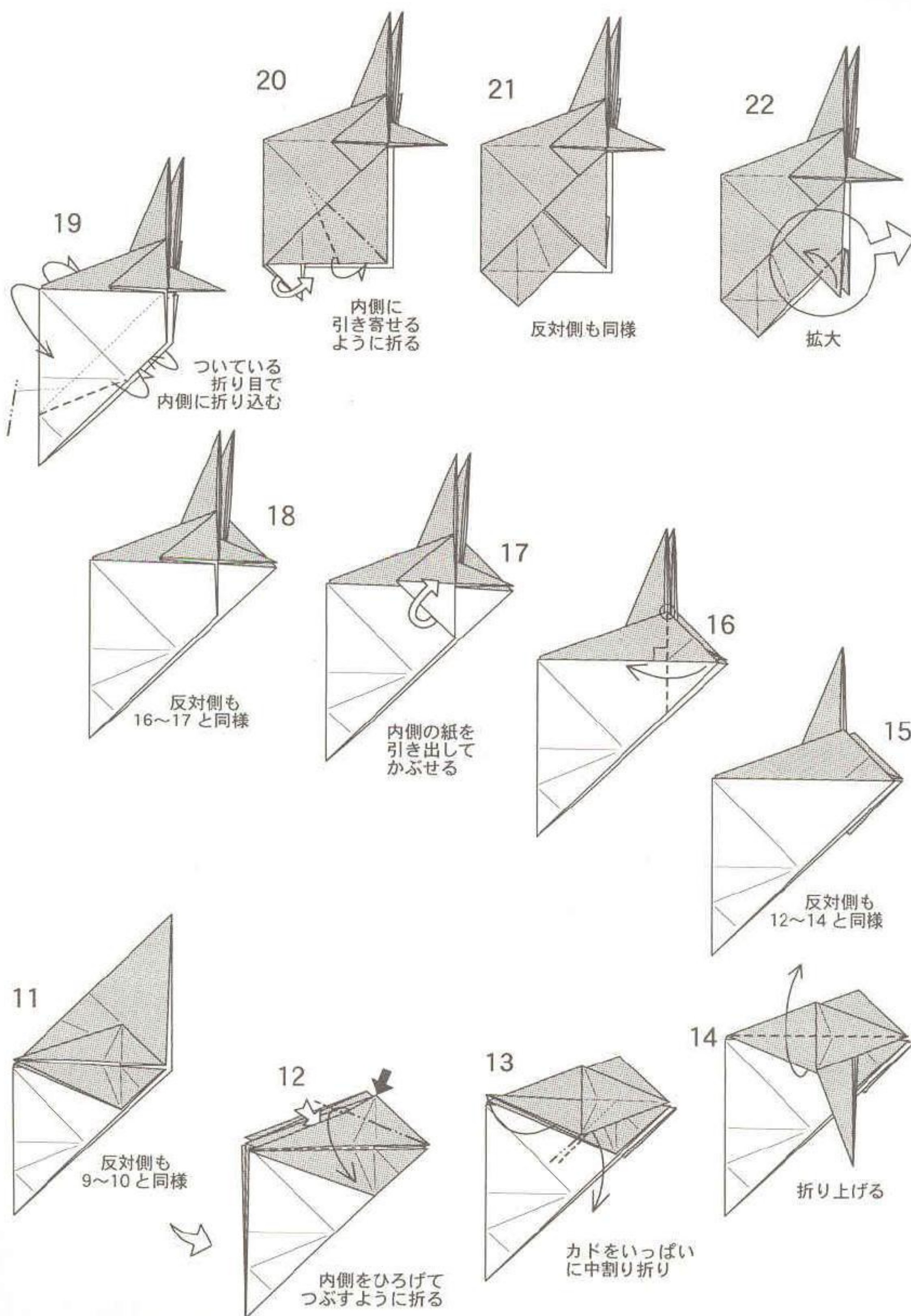


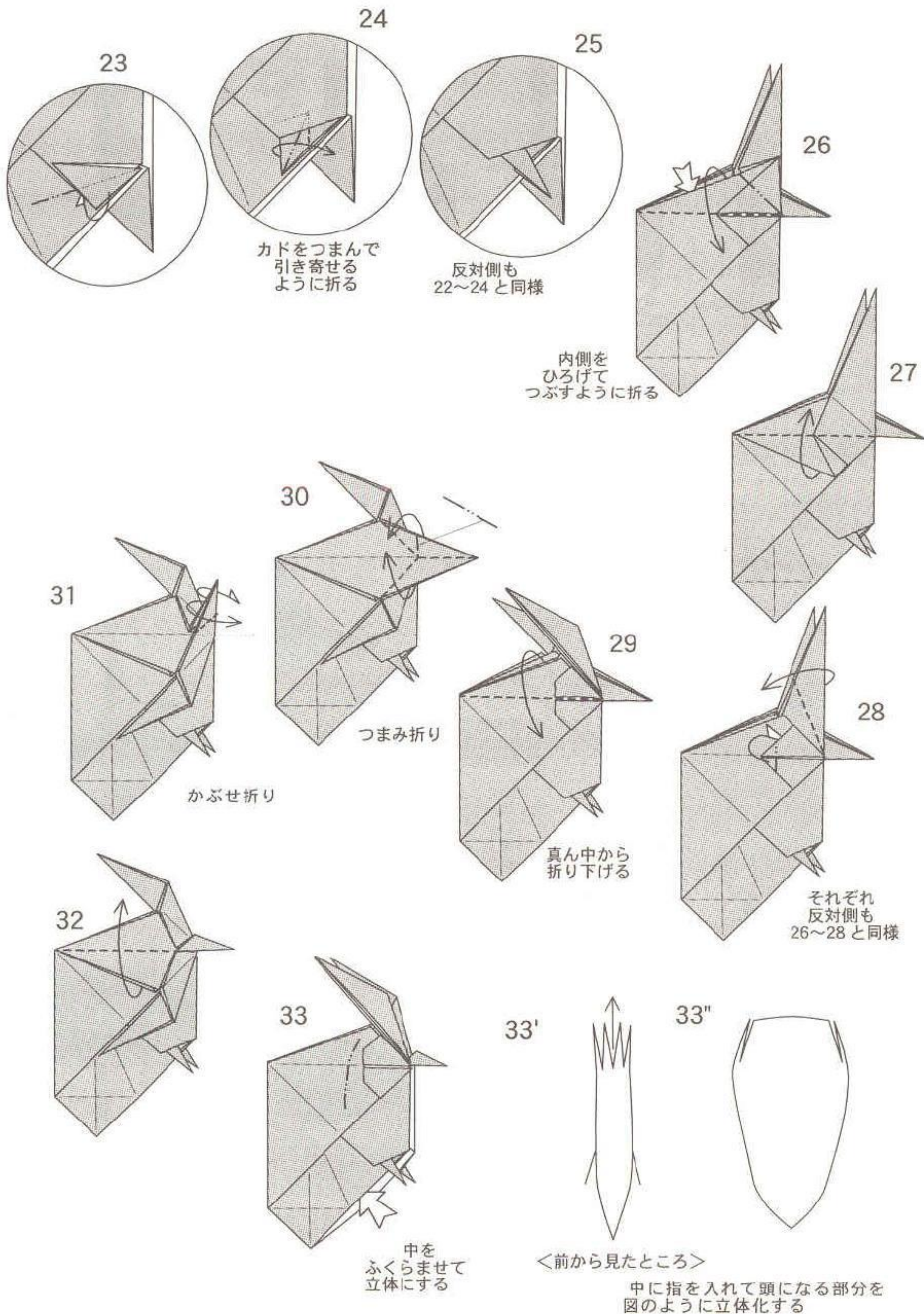


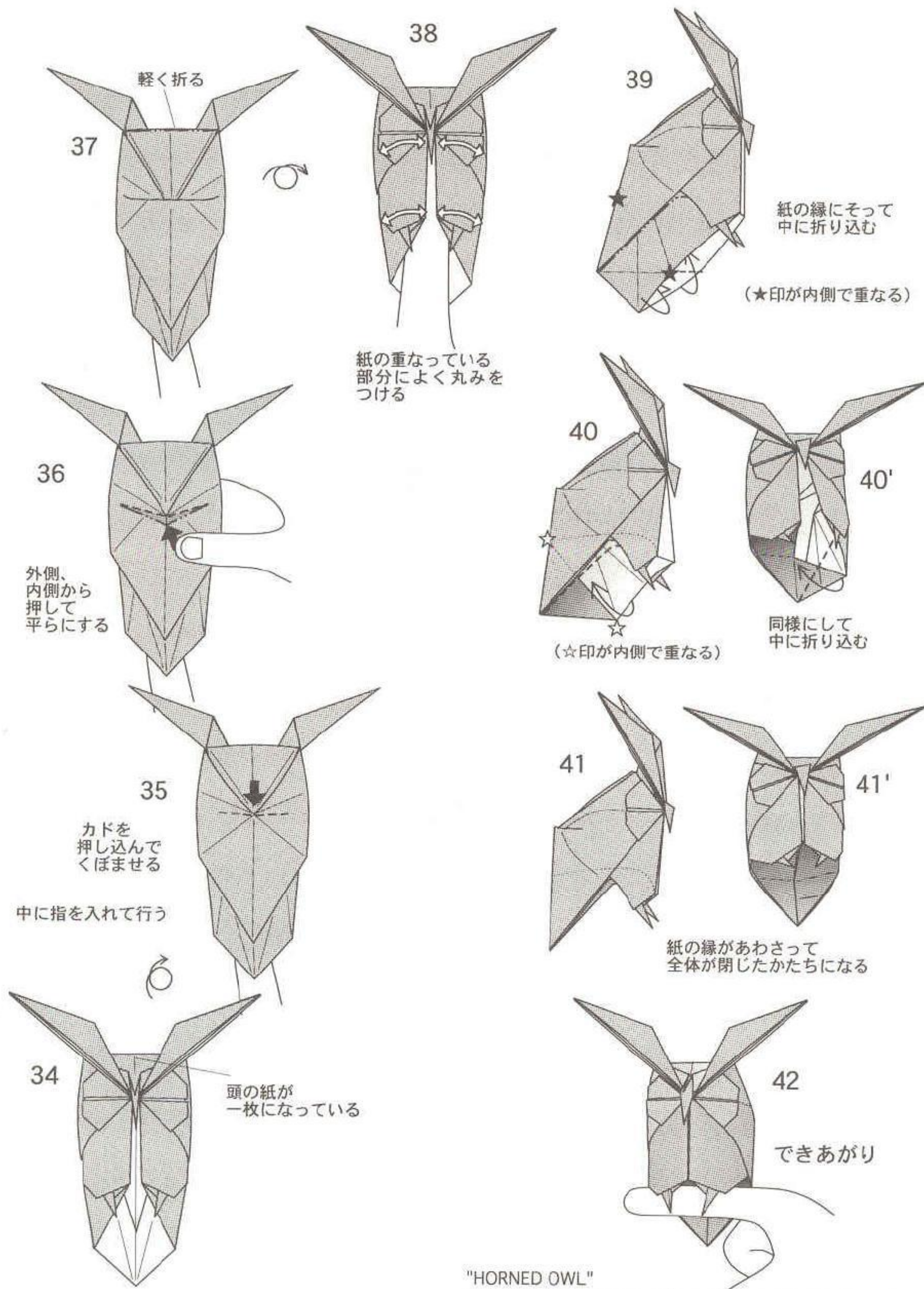
みみずく

作／図 小松英夫







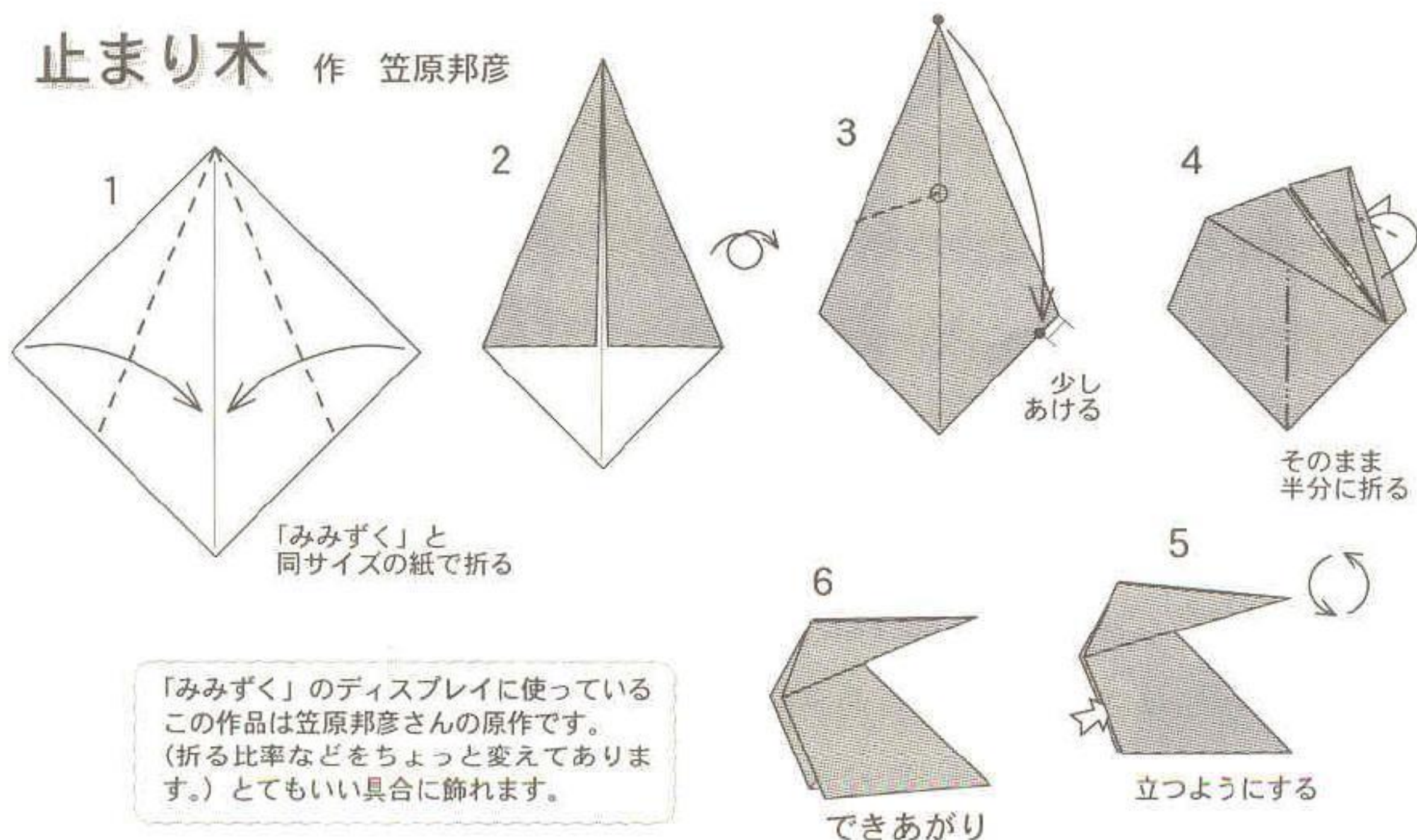


"HORNED OWL"

model designed by Hideo Komatsu September 1997

diagrams produced by H.K. October 1997

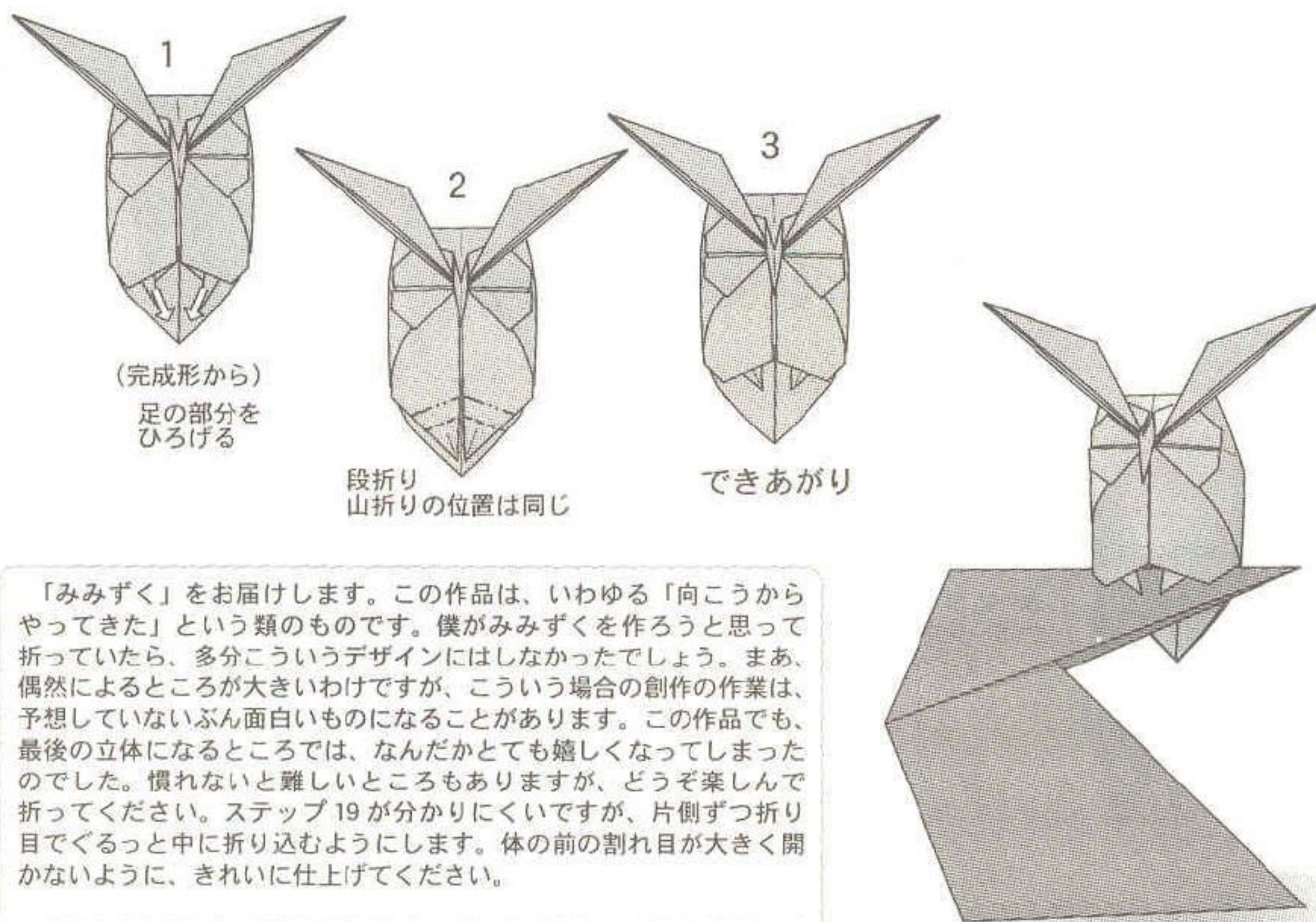
止まり木 作 笠原邦彦



「みみずく」のディスプレイに使っているこの作品は笠原邦彦さんの原作です。(折る比率などをちょっと変えてあります。) とてもいい具合に飾れます。

さて、この止まり木にのせると、みみずくの足が少し大きくて目立ってしまうので、次のように折り変えてください。

"PERCH"
original model designed by Kunihiro Kasahara
arranged by Hideo Komatsu
diagrams produced by H.K. March 1998



「みみずく」をお届けします。この作品は、いわゆる「向こうからやってきた」という類のものです。僕がみみずくを作ろうと思って折っていたら、多分こういうデザインにはしなかったでしょう。まあ、偶然によるところが大きいわけですが、こういう場合の創作の作業は、予想していないぶん面白いものになることがあります。この作品でも、最後の立体になるところでは、なんだかとても嬉しくなってしまったのでした。慣れないと難しいところもありますが、どうぞ楽しんで折ってください。ステップ 19 が分かりにくいですが、片側ずつ折り目でぐるっと中に折り込むようにします。体の前の割れ目が大きく開かないように、きれいに仕上げてください。

(実は「止まり木」は無断借用なのです。笠原さん、ごめんなさい。)

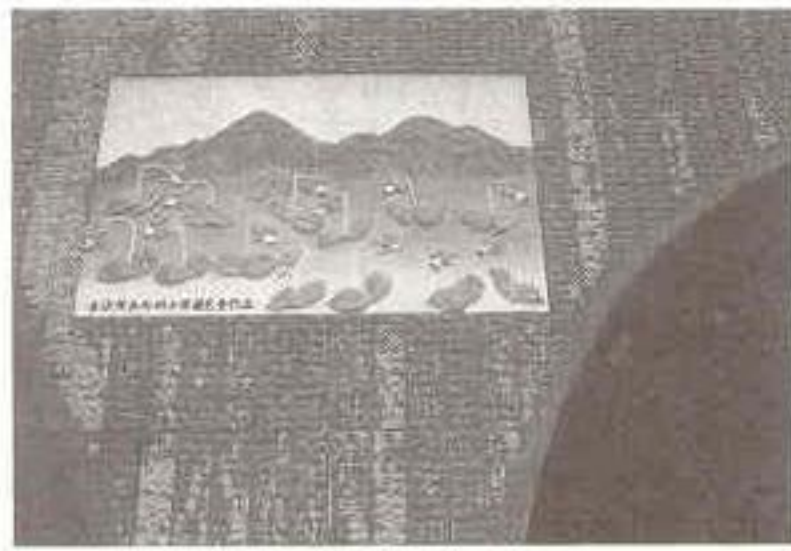
トンネルを飾る 折紙レリーフ 金沢

昨年4月に金沢市役所から、山川（やまごう）にできる隧道（トンネル）の入り口に子供たちでレリーフを飾りをつける話が、私の勤務している内川小学校に持ち込まれました。

内川小学校の周りは、春はギフチョウが、かたくりの吸蜜に飛びかう自然の宝庫です。山川に自棲しているかたくりを児童に写生してもらって、レリーフにすることになりました。

ところが写生してみると、個々の絵があまりに違っていてまとまりがつかないことが分かりました。花そっちのけでおたまじゃくしを描いた子もいたくらいです。

結局私の折紙作品「かたくり」（折紙探偵団折図集Vol.2）を全校で折ることになりました。花の数が多過ぎると全体がぼけるという市の要望をくんで、最終的には13個の花からなる作品に仕上げました。13は5、6年生の児童数です。背景は、5年生栗田泰典君が描いた医王山の山並みを使いました。この山は金沢を代表するものです。この絵を楮紙になぞってエアープラシでグラデーションをいれ、私が作った構図を元に6年生が折り紙のかたくりを貼っていきました。これをもとに業者が飾りのレリーフに仕上げ、トンネル入口に設置されました。子供たち特に6年生は小学校時代のとてもよい記念になると喜んでいました。子供の手によるものですから形は多少いびつですが、永く私の作品が残るので密かに喜んでいます。日頃から「紙は千年保つ。だから千年後に残る作品を作れるかどうか折紙作家としての本当の勝負だ」と言っている手前、一応面子が立ちました。（田中稔憲）



児童の感想 ▼内川といえば大自然、筍、そして、かたくり。かたくりを折り紙で折る？と聞いてすごくおどろきました。花、くき、葉などを1～6年生で分担して作りました。いろいろな人が作るとそれぞれの個性が出て、またちがったものができます。全校生徒38人の個性あふれた作品を合わせると、とても立派な作品になりました。1つ1つのもののいろいろな表情がとても印象的でした。（6年 小岩良行）

▼何回かかたくりをつくったことはあったけどけっこうむずかしかった。でも練習しているうちになれてきて、本番のときもうまく作れてよかった。



かたくりの制作をよくみると、全部がきれいでよくできているなあと思った。かたくりの花もうまくできていると思うけど、背景の山もよかったと思う。（6年 栗田 恵） ▼かたくりのおりがみが、山川トンネルに、かざられるというのを聞いて、みんな1～6年生がそれぞれかたくりの各部品をつくり、力をあわせて作りました。今では山川トンネルにかざられ、ぶじ終わってよかったです。あと、いい記念になりました。（6年 畠田健吾）



折紙紙の銭学

京都・長岡京

折り紙作品のお値段はどういう具合に決まるのでしょうか。それが完全無欠のオリジナル作品なら、作者の一存で決めてしまっても良いものなのでしょうか。▼折り紙の場合、概ね材料費は僅かなものです。実費くらいはもらおうと計算したら、少なすぎて何やらばかばかしくなったりして、その上、作品を何年もの間飾るとなると、何時かは傷んだり色褪せたりしてしまうでしょう。特にほかしの折り紙は恐いですね。近い将来真っ白になってしまう恐れがありますね。でもだからと言って、1年以内に色が無くなったからお取り替えします、なんて家電じゃあるまいし。▼ええい、面倒だ、只でさしあげましょう、というのがこれまでの私でした。きっとあなたもそうでしょう。恐らく折る人のほとんどがこのタイプなのだと思います。「値段はどうでも是非買いたい。」とまでおっしゃる方には、「いっそのことプレゼントしましょう。」とついつい気前良くなってしまう、無欲な私。しかしその反面、「ちょうだい。」とねだるだけの人を、「買いなさい。」と突き放すつめたさだって持ち合わせておりますよ。▼とにかく私は、値札付の折り紙作品って見たことがないのです。コンベンションのオークションでも、折り紙作品だけは対象外ですものね。まあたまたま、うちのサークルの人から、京都のどこそで八角箱にお手玉詰めて千円で売ってあった、なんて報告があります。お手玉抜きやといったいどんなになりますやろ。▼実際、人様の作品の応用モノが多い私は、著作権を考慮せねばならないので、ますますややこしい。「X氏の作品応用モノ」を売るにしろあげるにしろ、X氏の許可を得なくてもいいものだろうか。応用の度合いにも依るけれど、その「度合い」なるもの、どうやって計ればよいのだろうか。▼昨秋の作品展をきっかけに作品の注文があり、こんな疑問で頭ぐるぐるのこの頃なのです。（橋高美保子）



鹿児島（47号地方版）では折り紙作品をオークションにかけ沢山売りました。作品販売や探偵団活動についてご意見をお待ちしています。次回予告：石の質感を持つ紙（上）の作り方。墨汁をご用意ください。（編）

Rabbit Ear つまみおり

折紙探偵団新聞が第9期目に入りました。皆さんの情報交換の場として幅広く活動していきたいと思います。身近な情報を情報をお寄せ下さい。

今年も東洋大で

第4回折紙探偵団 コンベンション

..... 7月25(土) - 26(日) の両日

第4回折紙探偵団コンベンションは、7月25日(土)、26日(日)の両日に行われる。場所は昨年同様、東洋大学白山校舎(東京都文京区白山、都営三田線白山駅、営団地下鉄南北線本駒込駅、各徒歩5分)。今年も折り紙で熱い2日間をどうぞ。

誰でも気軽に参加でき、現代折り紙の先端をいく若手折り紙作家と交流がもてるのが折紙探偵団コンベンションの最大の特徴。更に昨年に行っている吉野一生基金による海外の折り紙作家との交流もあり(詳しくは下の囲み記事を参照のこと)、折り紙が国際的なものであることを肌

で感じる事が出来るのも魅力の一つ。要するに初心者からご婦人方までカバーする講師陣が揃っていて満足できる「大折り紙大会」である。

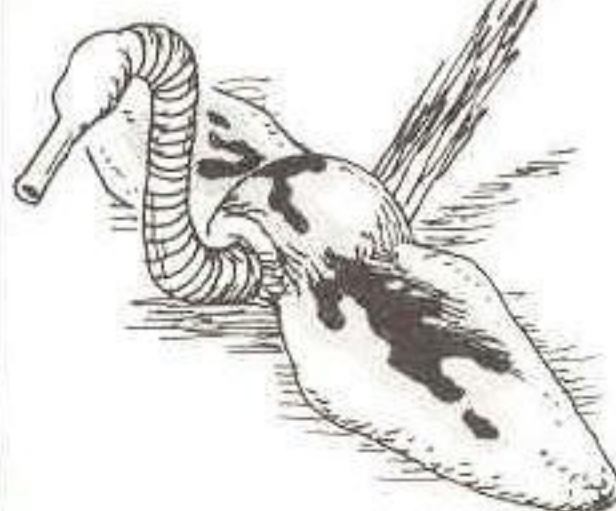
昨年から東洋大学の白山校舎を借りて開かれる大会は1教室1講習となり、充実した教室となっている。

各教室は、18名前後で行われ、1講

コマツビデオの折ったもんがち!

□真実□

『日本の稀少生物』
2021年刊より



・クレノフォルデディス
crenofoldedis

1998年に富山県沿岸で発見された、カンブリア時代からの「生きた化石」。生息数が極めて少ないため、詳しい生態は未だ分かっていない。なお、折り紙の鶴は、本来クレノフォルデディスを作った物であるとされている。

習50分単位とし、難解なものは連続2講習分の時間をとり、約2時間かけた講習もある。

今回の記念講演は、第6期の巻頭論文でお馴染みの富山大学教授鈴木邦雄氏による「オトシブミ・虫が折る折り紙」。楽しいお話が聞かれそうだ。

もちろん毎回好評な、折り図集も、より充実した内容で出版される。

その他には、コンベンションの大きな楽しみのひとつである懇親会も用意される。また、遠方より参加される方のため、または夜を徹して折り紙を楽しみたい方のために文京区本郷に宿舍の確保もしている。

全国の探偵団員が一同に集まる、年に一度のお祭りであるコンベンション。同好の士と心ゆくまで折り紙を堪能する貴重な時間である。今年もぜひ多くの人に参加していただきたい。

1998年度吉野一生基金海外招待者

Jeremy Shafer氏に決定

昨年の12月より募集しておりました吉野一生基金海外招待者には、3月15日の締め切りまでに、自薦・他薦を含め4名の応募者がありました。

選考委員会(岡村、川崎、川畑、布施、西川、前川、山口)が慎重に選考した結果、今年度の招待者は、Jeremy Shafer氏(人物については47

号15ページ参照)に決定しました。Jeremy Shafer氏の7月の来日を心よりお待ちしております。

また、惜しくも選に漏れた方も、来年度以降も招待事業を継続いたしますので、ぜひまたご応募ください。

We decided that Mr. Jeremy Shafer be invited to Japan by Yoshino Issei Fund

in 1998.

We had four applicants for the invitation of Yoshino Issei Fund from last December to 15 March. The selection committee, which consists of Okamura, Kawasaki, Kawahata, Fuse, Nishikawa, Maekawa, and Yamaguchi, decided after prudent discussion that Mr. Jeremy Shafer be invited this year.

We are looking forward sincerely to his going to Japan in July.

We continue this invitation project and we will welcome anyone's application.

なんじゃもんじゃグルメツアー

去る2月28日、第3回「折紙探偵団グルメツアー」が開催された。第3回ともなると、まさに「定例」の行事である。店は、浅草のもんじゃ焼き店「なんじゃもんじゃ」(国際通りR O X 斜め前)。店長の山田純さん、このひとは、浅草を紹介する地下鉄の中吊り広告で「休日には路上で折り紙のパフォーマンスをする」と紹介された人物である。むろん、探偵団のメンバーだ。店内にはもんじゃ焼きの匂いが染みついた(?)折り紙作品があふれ、レジ周辺などは何の店か分からないほどである。

東京でのグルメツアーはこれからも続けるが、この広いニッポン、東京周辺以外にもこんな店はあるはずだ。こんな店があった、あの店には折り紙が飾ってあるというような情報を、編集部にも是非寄せてほしい。それが「わたしの店」でもむろんOKだ。

これを読んでお腹がすいてきたひとは、自分でも「折り紙の店」を探し出して、グルメツアーを計画してみてもどうだろう。ツアーを計画してひとを集めることになったら、募集

記事を編集部どうぞ。ツアー後は、レポートも書いてね。

折り紙探偵団のマーク?

探偵団にマークが欲しいという話はかなり以前からあった。しかし具体的に考える人が現れず、長い間忘れられていた。今回おりがみはうすで北條高史氏の個展が開かれてい

て、氏のエアーメールという作品を見て思いついたデザインを一つ提案として出してみたい。皆さんの御意見、また、別の案などがあつたら事務局へ。



静岡ミニ・コンベンション開催

静岡ミニ・コンベンションを具体的な形にしようと、磐田の山田さんを中心に初めての会合が3月22日に静岡市でもたれた。大まかなガイドラインとして決まったことは、

●誰でもが気軽に参加できる温もりのある折り紙教室大会。

●マニアにとっても嬉しい折り紙の交流の場などを掲げ、地域の折り紙の輪を広げようというもの。

●会期は、会場の都合で変更の可能性はあるが、11月21(土)、22(日)日の2日間。会場は未定だが、希望者には

宿泊できるような施設になる予定。

各地でこのような催しが開かれていくことによって折り紙の普及と会員の拡大に繋がることことは間違いない。今回の静岡コンベンションは一つの実験でもある。

●参加者、スタッフ募集中!

静岡県内に限らず広く参加者、スタッフを求めています。気軽に声をかけて下さい。次回の会合は4月の末の予定です。興味ある方は探偵団事務局まで連絡下さい。

パリ・オリガミ報告 NO.1

..... 布施知子

3月26日から29日にかけて、パリのルーブル宮殿の地下に広がるカルーセル・ド・ルーブルのホールで「パリ・オリガミ」が開かれた。主なスポンサーは製紙業のガスコン・グループ。筆者がかつて体験したことのない国際的かつ大規模な折り紙展で、招待作家は8か国19人。日本からは吉澤章、桃谷好英、筆者の3人が招かれた。

広い会場はさながら見本市のようで、たくさんのガラスケースに作品が飾られ、他にも書店、段ボールで家具を作るキットを並べた店、あらかじめ模様を印刷した折り紙用紙を売る店、フランスの折り紙団体MFPPの店など、様々なブースが立ち並んだ。会場の中央では招待作家のレクチャーが順次行われ、4階ではMFPPの会員を

軸として、飛び入り教授歓迎の折り紙教室が一日中開かれた。各招待作家にはかなりのスペースが与えられ、まずまず存分な展示がなされた。他に自由参加の作品も展示された。

探偵団諸氏の作品も、畳2枚程の大きさで、奥行き40cm程のショウケースに並べられたが、残念ながら目立ったとは言い難い。まず各作品の創作者の名前が抜けていたので、だれがだれのやら分からなかった。どうもネームがはがれていたらしい。ネームは全体で「TANTEIDAN」とあり、その短い説明と、団長の名前が「Seiji Nishikawa」とあった。ロバー・ラングさんやスチーブ・ワイズさんと「これはホージョウかな」

「こっちはミヤジマ」「下のはコマツ」「カワハタはこれだ」と想像しあつた。お二人は情報に詳しく、ほとんど言い当てていたと思うが、かと言って断言はできなかった。川崎さんは単独で送られたのか、ちゃんとネームも入っていて、バラも雪をかぶった家も個性を放っていた。笠原邦彦さんの作品もガラスケース一つ分に飾られていた。

(以下次号)



▲会場入口 左右にジャンボおりがみの馬とラクダがお出迎え

おりすじ

探偵団との出会い 綿田治紀

僕が探偵団と出会ったのは、93年ごろのクォークというサイエンスマガジンの1ページでした。その1ページとは、故吉野一生さんの、ティラノサウルスの全身骨格を紹介した記事でした。

僕はこの折り図の本を、手に入れるために、いろいろな大きな本屋さんに聞きました。ところがどこもこの本をおいていませんでした。僕はどうすればその本を買えるのかと、店員に聞くと、店員は直接「おりがみはうす」という所に行くしかないとおしえてくれました。

そこで僕は文京区の白山にある「おりがみはうす」に初めて行きました。

僕が足を踏み入ると、そこはとんでもなくむずかしい折り紙の作品たちにあふれていました。そこでは、山口さんや西川さんたちが、僕に探偵団のことをおしえてくださいました。

それから僕はすぐに探偵団に入り、吉野さんや、前川さん川畑さん山口さんなどの、有名な折り紙作家さんに出会うことができました。

僕がこの会に入って初めてこんなに多くの人と、話をしたりつき会いをしたのは初めてで、僕の人生の転機だったと思いました。

こういうわけで僕は同じ趣味を持った人たちとともに楽しい時間をすごすことが出来てよかったと、思います。

● 求む、譲る

求む！

●第1回世界折紙展出品記念バッジ (1976年)

謝礼は応相談

折り鶴コレクターの前川氏が今では幻の逸品となっているNOAの第1回世界折紙展出品記念バッジを捜しています。譲ってもいいよという方、連絡は探偵団事務局へ。



●布施さん出演の

「おしゃれ工房」のビデオを求む
布施知子さんの大ファンという大阪の宮宗直美さんが、48号でお知らせしたNHK教育TV放映「おしゃれ工房」のビデオを捜しています。宮宗さんはおしゃれ工房の大ファンでもあり、布施さんがおしゃれ工房に出演されるの願っていた人で、ダビングできないかとVTRをお持ちの方を捜しています。連絡は探偵団事務局へ。

譲る！

ローバー・ミニ 1300 格安相談
故、吉野一生氏が乗っていた愛車ローバーミニを折り紙愛好家に譲ります
氏の情熱を忘れないためにも、愛車を譲り受けた山口氏が、手元に置いていてもなかなか乗る機会がなく、車がかわいそうと、折り紙愛好家に限定して譲渡したいと、希望者を捜しています。連絡はおりがみはうす 03-5684-6040 山口まで。

ORIGAMI USA コンベンション参加 ニューヨーク ツアー

6月26～29日の間に開催されるORIGAMI USAのコンベンションに参加しませんか。日程などは未定ですが、会期をはさんで約1週間の予定です。ツアーといっても団体ではなく参加者が一緒にバックツアーに申し込む形ですから、自分の都合に合わせた予定が立てられます。4年前にも川崎、前川、布施、山口の4夫妻が揃って参加しました。その時の感動と刺激で始まったのが、今の折紙探偵団コンベンションなのです。

更に今年は小松英夫君がORIGAMI USAの招待を受けて若手代表として参加します。その他の一般参加予定者としては探偵団代表の西川誠司氏、前川淳夫妻、山口真氏、羽鳥公士郎氏などの名が上がっています。

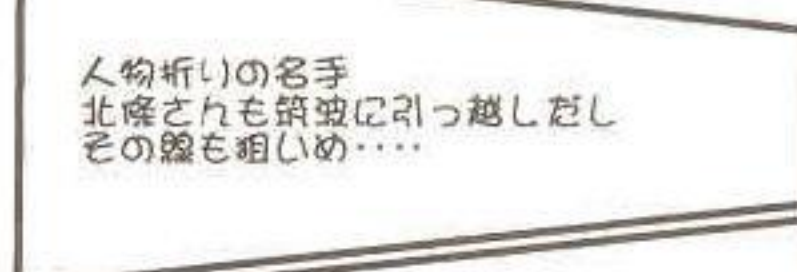
折紙探偵団定期例会の お知らせ

■4月25日(土) 今回はシビックセンターのほうになります。ご注意下さい。2時から木村良寿氏の講習会があります。

■5月30日(土) 区民センターで2時から宮島登氏の講習会があります。

迷探偵 オリン君 作:フリーハンド山梨

ネタさがしの巻



定価 300 円

発行・折紙探偵団

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

ギャラリーおりがみはうす内

Phone (03) 5684-6080

発行人・西川誠司

編集人・岡村昌夫

今月はデジタルまんがだよ！

先月の小笹さんの作品はギャオスも折れる：でした